

ユア・フレンド事業
20周年記念誌

令和4年3月

熊本大学教育学部・熊本市教育委員会

目 次

はじめに

- 1 ユア・フレンド事業20周年を記念して …… 熊本大学教育学部長 藤田 豊 3
- 2 ユア・フレンド事業20周年に寄せて
…………… 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター長 干川 隆 4
- 3 「ユア・フレンド事業」20周年を迎えて
…………… 熊本市教育委員会教育長 遠藤 洋路 5

事業20周年に寄せての祝辞

- 1 ユア・フレンド事業の成人を祝って
…………… 熊本大学大学院教育学研究科 元シニア教授 吉田 道雄 9
- 2 ユア・フレンド事業20周年に寄せて
…………… 熊本大学大学院教育学研究科 元教授 高原 朗子 10
- 3 ユア・フレンド事業に関わって思うこと
…………… 熊本大学大学院教育学研究科 元シニア教授 浦野エイミ 11
- 4 「ユア・フレンド事業」のこと
…………… 教育学部附属教育実践総合センター 元シニア教授 北崎 佳正 12
- 5 ユア・フレンド20周年に寄せて
…………… 熊本市教育委員会 元教育次長 三原 悟 13
- 6 ユア・フレンド事業創設20周年記念に寄せて
…………… 熊本市教育委員会総合支援課教育相談室 江口 研一 14
- 7 ユア・フレンド活動に関わって
…………… 熊本市立竜南中学校 養護教諭 草場 啓子 15

ユア・フレンドをサポートするスタッフから

- 1 ユア・フレンドの20年―道半ばにして―
…………… 熊本大学大学院教育学研究科 教授 藤中 隆久 19
- 2 「ユア・フレンド事業」に関わって思うこと
…………… 熊本大学大学院教育学研究科 シニア教授 杉原 哲郎 20
- 3 ユア・フレンド事業について
…………… 教育学部附属教育実践総合センター 特任教授 中野 浩幸 21
- 4 ユア・フレンド活動と特別支援教育
…………… 熊本大学大学院教育学研究科 准教授 菊池 哲平 22
- 5 かけがえのない出会いと豊かな時間
…………… 熊本大学大学院教育学研究科 准教授 本吉 大介 23
- 6 ユア・フレンド事業20周年に寄せて
…………… 熊本市教育委員会総合支援課教育相談室長 田上潤一郎 24

7 ユア・フレンド事業20周年に寄せて			
.....	熊本市教育委員会総合支援課教育相談室指導主事	田平 拓也	25
8 ユア・フレンド事業20周年に寄せて			
.....	熊本市教育委員会総合支援課教育相談室	中原 裕子	26
ユア・フレンドから			
1 ユア・フレンドで得たもの			
.....	熊本大学教育学部小学校教員養成課程3年	佐伯 凌太	29
2 教職について顧みるユア・フレンド事業			
.....	熊本市立託麻北小学校 教諭	金子 裕美	30
3 ユア・フレンド学生へのアンケート調査			31
20周年の活動のあゆみ（年度ごとの活動実績）			41
Kumamoto Education Week における講演資料			47
編集後記と謝辞			
20年の重みをかみしめながら			
.....	熊本大学大学院教育学研究科 准教授	黒山 竜太	59

はじめに

ユア・フレンド事業20周年を記念して

熊本大学教育学部長 藤 田 豊

平成14年2月に、熊本市教育委員会と熊本大学教育学部との連携協力に係る協定が結ばれてから、ユア・フレンド事業が今年の2月で満20周年を迎えます。我が国の不登校の児童・生徒数が横ばいから増加へ転じる（平成13年138,722人→平成23年117,458人→令和2年196,127人）なかで、「学校に復帰することを目指さない」不登校児童・生徒を支援する事業を運営して参りました。過去数年間の活動状況を見ますと、コロナ禍の影響を受けた令和2、3年度を除けば、毎年150名を越える学生がユア・フレンドとして登録し、学校や家庭、その他適応指導教室等に派遣され、その回数も年平均で2000回近くに上ります。開設以来、不登校支援のための実績を着実に築き上げて参りました。

今からちょうど10年前になりますが、ユア・フレンド事業10周年記念シンポジウムが開催されました際に、本事業がどのように立ち上げられ、熊本市教育委員会と熊本大学教育学部との連携協力により運営されて行くようになったのか、「学校復帰を目指さない」画期的な不登校児童・生徒の支援事業がスタートするまでの経緯が詳細に報告されました。文科省の不登校支援に係る考え方が「学校復帰を目指す」から「社会的自立を目指す」へ方針転換されたのが平成29年ですから、その15年以上も前に始まった「子どもたちの学校復帰を目指さない」本支援事業の取組みは、全国の様々な自治体からも注目されました。

毎年、ユア・フレンドとして登録した学生は、“子どもの話し相手になってあげること” “子どもと一緒に楽しく遊んであげること”などを重視し、決して“学校に復帰させようとしめないこと”、“学習指導をしてはいけないこと”などについてオリエンテーションを受けた後、子どもたちのユア・フレンドとして活動に参加して行きます。教育学部に入学してきた学生であれば、おそらく、ユア・フレンドとして行ってはいけないこと、すなわち、学校に来て欲しい気持ちを伝えたり、登校できるようになる手立てを一緒に考えたり、勉強が分からないなら、効果的な学習方法を教えようとしたりする気持ちに駆られるかもしれません。ユア・フレンドとして不登校の子どもに寄り添うことについて、20年にわたってこの事業に携わって来られた藤中隆久教授によれば、「子どもたちの将来のために子どもたちの“いま”を犠牲に（何かを強制したり）するのではなく、子どもたちの“いま”は、“いま”を充実させるためにあることに気付けるようになること」と説明されています。その上で、子どもと一緒に楽しい時間を過ごすこと、一緒になって何か楽しい活動を共にすること、そこにこそ、学生が「ユア・フレンド」の本質に触れる機会が生まれるのだと主張されています。

この2月に開催された“熊本 Education Week 2022”では、20周年を迎えた企画として「不登校支援 TSUNAGU～誰ひとり取り残さない教育のカタチ～」が紹介されました。その中で、教職大学院に在学中の木山秀太さんが、ユア・フレンドに参加したきっかけについて、「教室のなかで欠席している子どもの机を見て、実際（学校に出て来れない子ども）はどうなっているのかが分からない。欠席している子どもについて、悩みや不安を抱えた不登校の子どもに関われる機会は教育実習では得られないので、ユア・フレンドの活動を通して学びたい」と話していました。これからの新たな10年に向かって、この支援事業に秘められた可能性がもっともっと花開いて行くことを期待します。

最後になりましたが、この支援事業を運営するために長きにわたってお力添えをいただいて参りました遠藤洋路教育長様をはじめ熊本市教育委員会の諸先生方に厚く御礼申し上げますとともに、本事業が教育の本質を問い続ける活動として今後もさらに発展して行くことを願って、ご挨拶とさせていただきます。

ユア・フレンド事業20周年に寄せて

熊本大学教育学部附属教育実践総合センター長 干 川 隆

熊本大学教育学部と熊本市教育委員会との連携事業であるユア・フレンド事業は、今年で20周年を迎えることができました。20年間という長期に渡る事業を通じて、ユア・フレンドとして不登校の児童生徒にかかわった多くの学生を教師として輩出できたことは、地域貢献や教員養成を目的とする実践センターとして大きな役割を果たせたこととなります。こうして20周年を迎えることができましたのは、ユア・フレンドとして活動された学生の皆様、相談室の先生方をはじめとする熊本市教育委員会の皆様の努力の成果であり、実践センターを代表して関わられた皆様に感謝を申し上げます。

私は、ユア・フレンドの体験は教師になったときに自身の視点を広げる貴重な機会になっていると思います。以前に研修会でお話したことですが、元乃木坂46の絶対的なエースと言われた白石麻衣は、中学校時代に不登校でした。白石麻衣は、中学2年生の2学期に他の生徒から呼び出されてきついことを言われます。その時に、「あ〜、だったらもう学校いいや、行きたくないみたいな感じになって。」と思ったそうです。その日から、学校に行かなくなりました。お母さんにも心を閉ざしてしまって、ずっと部屋に引きこもってしまいます。そのときのことを、「仲良かった友達が行こうよって家まで迎えにきてくれたんですけど、私も頑固な部分があるので行けないってなっちゃって。」と語っています。この言葉は、不登校の生徒の気持ちをよく表しています。頭ではわかっていても心とうまく折り合いがつかない。中学3年生のときは、仲の良い友だちに誘われて学校には行ったのだけれど、教室には入れなかった。「馴染めなかった。」と表現しています。

熊本大学に入学され、教師として活躍される人たちの多くは、不登校を体験したことはないと思います。おそらく失敗した経験は少なく、多くの方が目標を決めて努力すれば目標を達成できていると思います。ところが不登校の子どもたちは、白石麻衣の言葉にもあるように頭ではわかっていても自分の心とうまく折り合いがつかないのです。

教師になる学生には、ぜひユア・フレンドとして不登校の子どもたちに寄り添う体験をして欲しいと思います。ユア・フレンドの体験は、学生にとって自身の視点を広げる大きな機会となるでしょう。その経験は、教師になったときや仕事に就かれたときに、さまざま多様性のある人たちを受け容れることにつながると思います。

今年度も昨年度に引き続き、コロナ禍で人と人との絆が裂かれていて、不登校の児童生徒が増えているとの報告もあります。このようなコロナ禍だからこそ、人と人との絆を大切にしたいユア・フレンド事業の大切さを痛感しています。大学の宿命で、経験のある学生を送り出し新しい学生を迎えながら事業を継続しなければなりません。引き続き学生を確保してユア・フレンド事業を継続できるように実践センターとしても努力することをお誓いし、20周年の挨拶といたします。

「ユア・フレンド事業」20周年を迎えて

熊本市教育委員会教育長 遠藤 洋路

このたび、ユア・フレンド事業が記念すべき20周年を迎えたことに当たり、一言ご挨拶申し上げます。

本事業は、平成14年に熊本大学教育学部と本市教育委員会が連携協力に関する協定を結んだことに伴い、連携協力事業の一つとして実現しました。当時の本市の不登校児童生徒は約600人と、現在の5分の2ほどでしたが、これから不登校の児童生徒が増加していくのではという懸念があったと伺っています。

そこで提案されたのが、教員を目指す熊本大学教育学部の学生に、不登校対策に関わっていただくという案でした。しかし、事業の具体化は簡単ではなかったようです。何度も検討を重ねた結果、不登校の児童生徒の「学校復帰を目指さない」という方向性が決まりました。当時は、どの自治体においても学校復帰をめざす不登校対策が主流でしたので、この転換は画期的なものであったといえます。

時は流れ、平成29年11月に文部科学省が通知した「不登校児童生徒への支援の在り方」では、これまでの学校復帰を目指す支援から、社会的自立を目指す支援が重視されるようになりました。まさに、このユア・フレンド事業が当初から目指していたことであり、事業を立ち上げた方々の先見の明に敬服するばかりです。

教育学部の学生が、不登校の児童生徒と家庭や学校でつながり、話し相手や遊び相手になってあげる。そんなシンプルな取組でありながら、児童生徒にとって家族以外の人とつながる大切な機会となり、教員を目指す学生にとっても子どもとの関わりを学ぶ場となるのが、ユア・フレンド事業です。本事業の意義については、本年1月に開催したオンラインイベント「Kumamoto Education Week」においても、現役学生やOB・OGの声を交えて全国で紹介させていただきました。

本来であれば、20周年を記念するシンポジウム等を開催し、今後に繋げたかったところですが、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、記念誌の発行という形となりました。ユア・フレンドに関わられた方々の思いが込められた記念誌となっておりますので、ぜひご一読いただき、ユア・フレンド事業の素晴らしさを感じていただければ幸いです。

結びに、本事業において本市教育委員会と連携し、活動を支えていただいております熊本大学教育学部の関係者の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、この20年間に、本事業に携わっていただきました関係各位の皆様に深く感謝申し上げます。本事業のますますの発展をお祈りいたしまして、教育委員会のご挨拶といたします。

事業20周年に寄せての祝辞

ユア・フレンド事業の成人を祝って

熊本大学大学院教育学研究科（教育学部附属教育実践総合センター）
元シニア教授 吉田道雄

「ユア・フレンド事業」が20周年を迎えるとお聴きして、大きな驚きと嬉しさを覚えました。成人式、おめでとうございます。わたしは、時の巡り合わせでユア・フレンド事業のスタートに関わることができました。とにかくはじめての試みですから、どのくらいの学生が集まってくれるのか予想もつかないまま最初の説明会に臨みました。その結果は「心配ご無用」の大盛会でした。たくさんの方々が教室に集まった光景には大いに心を動かされました。そして、みんなが全力を出して課題を抱えた子どもたちと向き合ってくれました。そのエネルギーあふれる活動が成果を生み出し、社会的からも大いに評価され、今日に至ったのです。

そうした中で、わたしは一つのケースを思い出します。それはある学生が担当になった生徒の自宅に通い続けたにもかかわらず、一度も会うことができなかったというものです。こうなると、「自分は役に立つことができなかった」と思うのは当然です。ところが、あとになってその生徒の母親からある事実を伝えられるのです。その生徒は最初のうちはユア・フレンドと会うことをはっきり拒否していました。しかし、それでも自宅に来ることを止めないことから、心の中に変化が生まれたようでした。そして、時間が経過するとともに、母親に「今日はあの人はきたの」と聴くようになったというのです。それでも実際に会うことはできなかったのですが、母親はこうした子どもの変化を心から喜んでいそうです。わたしは、現実には会えない状況が続いても訪問を止めなかった学生の話聞いて感動しました。

ところで、わたしは様々な機会に、組織の方々から「最近の若者はどうですか」と問いかけられることがあります。その多くが職場で接する若者たちの対応に苦勞されているようです。その顔には、「いやあ、学生にしても何を考えているかわかりませんよ」という嘆きを期待されている雰囲気を感じています。そんなとき、わたしはニコリ笑って、「このごろの学生は、目的がはっきりした活動にエネルギーあふれる行動をしますよ。自分にはあんな元気さはなかったなあと感じてしまうほどです」とお答えします。このとき、わたしの頭の中にユア・フレンドとして全力を挙げるみなさんの姿が浮かんでいたことは言うまでもありません。

わたしは、「ヒト」は「ヒト」と関わることで「人」になり、「人」と「人」が関わることで「人間」になると考えています。ユア・フレンドは、その「関わり」を創りあげる欠かせない役割を果たすのです。それは子どもたちに望ましい影響を与えるだけでなく、ユア・フレンドであるみなさん自身の成長につながることを確信しています。

ユア・フレンド事業20周年に寄せて

熊本大学大学院教育学研究科（教育学部附属教育実践総合センター）
元教授 高原 朗 子

平成14年度から熊本市教育委員会と熊本大学教育学部と連携事業としてはじめられたユア・フレンド事業が20周年を迎えられたとの事、心よりお祝い申し上げます。

私は平成14年10月に熊本大学教育学部附属教育実践総合センターに着任し、平成30年に退職するまで、本事業担当教員として本事業に関わる業務をさせていただきました。

その16年間、4月のユア・フレンド事業説明会、5月の研修会、年2回の意見交換会などを通して、多くの学生が本事業に参加し、子どもたちと関り、様々な感動や共感やその他の思いをもって成長していく様子を見て参りました。この事業はご存知のように熊本市内の不登校の児童・生徒に対する支援事業であります。大学から見たらまさに教員を志す学生たちにとっての生きた学びの場であり続けていることが本当に素晴らしいことだと改めて思っています。その成果なのでしょう、ユア・フレンドの体験者の中から教員や公認心理師・臨床心理士として子供に関わっている人たちもずいぶん増えていると聞いております。また、教員や心理専門職でない卒業生たちにとっても、学生時代に「他者の為に自分の時間を捧げた」貴重な体験となっていることでしょう。

私が携わり始めた頃には、「ユア・フレンドって何？」と認知されていなかったこの事業が、すっかり熊本市教育委員会と熊本大学との連携事業として、さらには教育カリキュラムの一つとしてしっかりと位置づけられていることにも深い感動を覚えています。

その間、熊本市教育委員会の多くの先生方のご指導をいただいたこと、誠に感謝しております。また、熊本大学教育学部長、教育実践総合センター長はじめ教育学部の同僚の教員の皆様、さらには事務スタッフの皆様には様々なことで支えていただきました。そのお支えにより本事業が大きな事故なく続けられたと思っております。

私自身にとってもユア・フレンド事業は、不登校の子供たちやそのご家族そして彼らを見守っている学校の先生たちの色々な姿や思いに触れることが出来、臨床心理士として学びの多いものでありました。さらには平成28年の熊本地震において、臨床心理士として熊本市内の児童・生徒の心のケアに関わるにあたって、ユア・フレンド事業でお世話になっており信頼関係が出来ている多くの教職員の先生方と協働することになり、本当に安心して全国からのスクールカウンセラー（臨床心理士）を受け入れることが出来たことも、素晴らしい思い出の一つです。

「熊本大学教員として、貴方は何を成したのか？」と問われると、真っ先に浮かぶのは、まさにユア・フレンド事業です。私にとってこの一番に心に浮かぶユア・フレンド事業、この事業がこれからも熊本にいる不登校の子供たちやそのご家族にとっての安らぎとなりますよう願ってやみません。

今後の本事業のご発展をお祈りしております。

ユア・フレンド事業に関わって思うこと

熊本大学大学院教育学研究科（教育学部附属教育実践総合センター）
元シニア教授 浦野 エイミ

スクールカウンセラーとして中学校に勤務していた時にユア・フレンドの学生とお話をしたことがあり存在は知っておりましたが、ユア・フレンド事業に関わるようになったのは平成26年4月に教育実践総合センター教育相談室にシニア教授として着任してからでした。それから3年間ではありましたが、ユア・フレンド意見交換会などに参加させてもらうことができ、直接に学生たちから様々な思い、悩み、意見を聞くことができました。

このたび20周年を迎えるとお聞きして、10周年記念シンポジウム報告書や毎年の意見交換会の資料を見直しました。そしてこの事業の素晴らしさ、凄さを改めて感じているところです。熊本市教育委員会と熊本大学の連携の良さや事業内容の充実、先輩学生たちの頑張りなど様々な要因があって継続してきていると思いますが、大学教員、臨床心理士の立場からユア・フレンド事業の意義について私なりに思うところを述べてみたいと思います。

まず児童・生徒にとってユア・フレンドは先生、SC、親とも違うけれど自分とだけ向き合っただけでわかってもらえる存在で安心感が得られる。人とつながることに怖さや苦手を抱えているが故に集団に不安を感じている児童・生徒はユア・フレンドと一緒に楽しむという経験を通して人とつながる楽しさを味わう。それが自信となり人間関係の広がりにつながり、登校や次のステップに進む原動力となっているのだと思います。

次に学生にとってのユア・フレンドの意義について考えてみました。学生のほとんどはこれまで学校での適応が比較的良好だったと思います。しかし将来、教師になれば学校に不適應感を抱える児童・生徒に出会うことは必然であり対応への不安を感じることも不思議ではありません。学生時代にそういう児童・生徒に出会って理解を深めたいという学生たちの思いとユア・フレンド事業の趣旨がまさにぴったりと言えると思います。そしてこの事業が脈々と受け継がれてきたことの要因の一つが年に2回開催されるユア・フレンド意見交換会だと思います。先輩の体験談を聴くだけではなく、グループに分かれての協議が行われる。そこでは経験者から活動を通して得られたこと、上手くいかずに悩んでいること、未経験者の不安など率直な意見交換が行われる。「子どもの好きなことを一緒に楽しみ、時間をかけて信頼関係を得る」「人と人がつながることが体験的に学べる」「勇気のいることを子どもが話してくれるのは心を開いてくれていることだ」「気を遣い過ぎず自然体で友だちのように、ただ傷つけないようにする」「ひとりひとりを知ろうとすることが大切」「子どもは受け止めてくれる人がいるだけで安心なのではないか」このような学生たちの生き生きとした討議を聴いていると、実際の活動と同じくらい貴重な体験の時間だと感じました。

これからも30周年に向けてユア・フレンド事業が学生たちに受け継がれていくことを願っております。

「ユア・フレンド事業」のこと

教育学部附属教育実践総合センター 元シニア教授 北 崎 佳 正

私の「ユア・フレンド事業」との関りは、次の三つの時期であった。小学校・中学校の教員をしていた時期、熊本市教育センターのフレンドリー（適応指導教室）に相談員として勤務した時期（後にフレンドリーは、「子どもセンター あいばるくまもと」に移る）。そして、熊本大学教育学部附属教育実践総合センターで勤務した時期である。

「ユア・フレンド事業」が始まって間もない時から、小中学校教員、フレンドリーの相談員、教育実践総合センター教員と違った立ち位置で、子どもたちやユア・フレンドと関わることになり、偶然ではあるとはいえ、何か運命的なつながりがあるのかなあと感慨深い思いであった。

学校では、不登校といってもいろいろな子どもたちがいた。家から一步も出られない子ども、校門まで来たけれどもそこからUターンする子ども、学校には来たけれども教室に入れない子ども、と様々である。そうした子どもたちに「ユア・フレンド」として活動する学生の皆さんは、子どもたちの実態を踏まえて実に丁寧且つ献身的に寄り添い、活動を積み重ねられた。そうした過程で子どもたちに笑顔が現れ、結果的に学校生活が送れるようになるケースを私の勤務校でいくつも見る事ができた。

教職を辞して数年後に学校を訪問した時、ユア・フレンドと共に教室に入れるようになった子どもが、楽しそうに授業を受けている様子を見る機会があり、改めて「ユア・フレンド」活動のすばらしさを実感した。

フレンドリーでは、ようやくフレンドリーに通えるようになった子どもに話し相手となっていた。フードを目深にかぶり、相談員とはもちろんのこと誰とも話さずに過ごす子どもと1対1で向き合っていた。会話を手がかりを求めて様々な工夫を重ねて、フードのバリアが外れ、会話が少しずつ弾む様子を見て、相談員一同、喜んだことを思い出す。

教育実践総合センターでは、「ユア・フレンド」の研修会、意見交換会等に参加させていただいた。小グループでの意見交換会に出させていただいたが、そこでは「ユア・フレンド活動」での悩み、不安等が多く出された。「子どもと会えない」「一言も話さずに活動が終わった」等々である。実はこの意見交換で自分自身の活動を話すことで、自分自身の活動を整理することができ、グループ内の他者の意見を聞くことにより、活動の方向性を見いだしていくことが多々あったようだ。これらの諸研修は「ユア・フレンド活動」にとって実にタイムリーなものであったと思う。

「教師でもない。親（保護者）でもない。もっと子どもに近い誰か。」それが「ユア・フレンド」であるという当初の目的は、20年を迎えた今も息づいていると思う。この事業が今後も継続されることを願っている。

ユア・フレンド20周年に寄せて

熊本市教育委員会 元教育次長 三 原 悟

ユア・フレンド事業が産声を上げて20年。事業20周年に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

まずは、これまで本事業に携わってこられた熊本大学教育学部の関係各位に対し、深くお礼と感謝を申し上げます。

振り返ると今から20年前、当時本市の課題となりつつあった不登校児童生徒に対策を講ずるよう命を受け、試行錯誤した日々を思い出します。当時、「不登校児童生徒の学校復帰を目指さなければならぬ」という固定観念に縛られていた私は、それを目指してもなお不登校児童生徒が増加の一途を辿る状況に頭を抱え、果たしてこれでいいのか、いや他にも方法があるのではないかと、逃げ出したくなる気持ちと闘いながら日々悩み続けていました。そしてたどり着いたのが、“学校復帰を目指さなくてもいいのではないか” “大学生は悩める子どもたちと年齢も近く共通する話題も多いため、子どもの心のスイッチが良い方向に揺れ動くかも知れない” という考えでした。当時例を見ないこの企画は、いくつかの壁に行く手を阻まれながらも、熊本大学教育学部各位の力強い後押し（理解と支援・協力）により、実現に向け着実に歩を進めていきます。そして平成14年2月、ついに熊本大学教育学部と熊本市教育委員会の間で協定が締結されたのです。

あれから20年。現在は新型コロナウイルス感染拡大の影響で家庭派遣を休止している状況にありながらも、ユア・フレンドを活用する学校数、活動回数ともに例年を上回っているようです。また今年度途中からは範囲を熊本市外にも拡大し、すでに益城町には数名の学生を派遣していると聞いております。時代の状況に合わせ、柔軟に対応してきた本事業は、世間への認知度も拡大し、最近はこの取組に興味をもって熊本大学教育学部を受験するケースも増えているようです。ユア・フレンド経験者が、学校現場はもちろんのこと、それ以外の職に就いても、不登校児童生徒と関わった経験を活かしながら活躍している事実からも、この事業の意義がいかに大きいと感じる次第です。

熊本地震、さらには新型コロナウイルス感染拡大という未曾有の災害に直面しながらも、発展し続ける本事業を、立ち上げに関わった一人として、大変嬉しく、感慨深く思っております。これもひとえに、この活動を支えていただいている熊本大学教育学部関係各位のおかげだと強く感じております。

不登校児童生徒数増加に歯止めがかからない状況下において、このユア・フレンド事業に求められる役割は今後さらに大きくなっていくことは間違いありません。

最後になりますが、大きく変化するであろうこれからの10年先、20年先、時代に柔軟に対応しながらこの事業がますます発展していくことを祈念しまして、私のご挨拶といたします。

ユア・フレンド事業創設20周年記念に寄せて

熊本市教育委員会総合支援課教育相談室 江口 研一

ユア・フレンド事業創設20周年にあたり、その記念誌に原稿を寄稿できますことを大変光栄に感じています。

私のユア・フレンド事業との出会いは、まさにこのユア・フレンド事業が開始された平成14年度に、当時の熊本市教育委員会教職員課の学校サポート係の指導主事となったときでした。直属の上司で後の熊本市の教育次長になられる三原悟先生より、「今年度からユア・フレンド事業を始める。この事業は絶対成功させねばならない。」と話があり、非常に緊張したことを覚えています。

さて、ユア・フレンド事業は20年という節目の年を迎えています。この事業が20年に渡り継続できたのは熊本大学教育学部関係者の皆様方をはじめ、この事業に関わった全ての人々の熱意と献身があったからではないかと考えます。なぜなら、その後この事業に対する問い合わせや視察は多数ありましたが、他都市ではこのユア・フレンド事業のように大きな成功を収めている事例は他に見ないからです。

この事業の20年を振り返ってみるとその功績は様々あり、この原稿の中ではその全てを紹介できません。そこで、この紙面では事業に関わった経験を持つ学生たちが今もユア・フレンド活動の理念を心の中に持ち続け、教諭、養護教諭となり学校教育に貢献しているという功績の一事例を紹介したいと思います。

私は、現職の校長時代に忘れることができない出会いがありました。それは熊本地震の年の7月のことでした。学校は震災から3か月は経ったものの震災後の混乱は続き、教職員には疲労が見られ、子どもたち、保護者の動揺もまだ続いていた時期でした。

そのような中、長崎県教育委員会から私の勤務する白山小学校へ一人の養護教諭が被災地緊急支援のための派遣で来てくれることとなりました。彼女の名前は久井規子養護教諭でした。私は、久井規子さんがユア・フレンドの一期生として素晴らしい活動をしてくれたこと、長崎県出身だったという記憶が頭の片隅に残っていました。

久井さんがいよいよ白山小学校に赴任してきた日に久井さんにそのことをたずねると、「私は、熊本大学出身でユア・フレンドとして活動しました。そのときの活動は、私が養護教諭として働く中でとても大切なものとなりました。その活動ができた熊本市に何か恩返しができないかと思い、緊急支援のための派遣へ手を上げました。」と話をしてくれました。

その後、久井養護教諭は翌年の3月末まで白山小学校の養護教諭として児童、保護者、職員から大きな信頼を得て、震災後の復興に貢献してくれました。久井養護教諭は、翌年3月末に熊本を離れ長崎の地に帰りましたが、現在も白山小学校の職員と交流を続けてくれています。

私は、先にも述べたようにユア・フレンド事業には様々な功績があると考えますが、この活動に参加した学生の皆さんが社会に出て何らかの形で子どもたちと関わり、ユア・フレンド事業の経験を生かして子どもと接することができるようになっていることは、この事業の大きな功績の一つではないかと感じています。

今後もこのユア・フレンド事業が継続され、大きな社会貢献がなされることを心より祈念いたします。

ユア・フレンド活動に関わって

熊本市立竜南中学校 養護教諭 草場 啓子

私は、養護教諭として勤務する前に「ユア・フレンドの派遣」に関わる仕事を行った。具体的な業務は、活動を希望する学生を登録すること、学校からの依頼をもとにユア・フレンドを学校に派遣し、打ち合わせを行うことだった。

当時の私は、児童生徒と関わりを持ったことがなかったため「大学生が登校できない児童・生徒と関わるのは難しいことなのではないか」と思っていた。

派遣が決まったユア・フレンドに連絡すると「ぜひ、行かせてください」という言葉が聞かれ、意識が高く、不安ながらもやる気が大きいことが分かった。その後、年に2回実施される意見交換会では「生徒と全然会えていない」などの意見や「最初は生徒と会うこともできなかったが、あきらめずに手紙のやり取り等で関わりを持ち続け、徐々に話をすることができるようになった」という報告もあった。どのユア・フレンドも悩みながら一生懸命に児童生徒と関わろうとする姿勢が見えた。

現在、養護教諭として、登校できない多くの児童・生徒と関わる中で、課題として、人とのコミュニケーションを上手に取れず、同年代の生徒と友人関係を築くことが難しい児童・生徒の多さに課題意識を感じている。そこで年齢が近いユア・フレンドが根気強くかかわってくれることで「友達づくりの練習」ができています。

これまでにたくさんのユア・フレンドにお世話になった。私が出会ったユア・フレンドは次のような工夫をしながら活動していた。

例えば、生徒と手作りの自己紹介すごろくを作成し、そのすごろくをしながら楽しく自己紹介をしていた。また、運動することが好きな生徒と体育館でバドミントンやキャッチボール、サッカーなどをして体を動かす機会を作った。さらに、絵が好きな生徒と大きな貼り絵を1年かけて作成し、卒業直前に仕上げた。

このように、登校できない生徒にとって何かを成し遂げ、達成感や爽快感を得ることはとても貴重な体験となった。また、なかなか学校で会えない生徒には、保護者に了解をとり、活動日に学校の電話で話すことで、ユア・フレンドに安心感を持ち、学校での活動につながった。暗い顔をして登校してきた生徒でもユア・フレンドとの活動中は、部屋から笑い声が聞こえることもあった。

登校できない児童・生徒にとって、学校に来ることはとてもハードルが高い。しかし、ユア・フレンドとの楽しい活動が学校に来る動機につながり、週に1回の活動は生活のリズムを作るきっかけになっている。

また、登校できない児童、生徒は家族以外の人との関りが少ない。思春期において人との関りは、成長する上でとても大切なものだと考える。安心できる存在となるユア・フレンドとの活動は、家族以外の誰かと接するとてもいい機会であり、良い影響を与えている。今後さらに、ユア・フレンドと学校が連携し、児童・生徒が少しでも登校できるきっかけや自立につながるよう支援していきたい。

ユア・フレンドをサポートするスタッフから

ユア・フレンドの20年 一道半ばにしてー

熊本大学大学院教育学研究科 教授 藤 中 隆 久

熊本大学教育学部と熊本市教育委員会が連携した不登校の子どもに対する支援事業（ユア・フレンド事業）は不登校の子が学校復帰することを目指さないという考えに基づいている。この考え自体は当時から多くの臨床心理学者は持っていたであろうし、また、教育関係者の中にもそのような考え方の人はかなりいたはずである。しかし、学者や教育関係者が私的にそのような説をとったわけではなく、教育委員会が公にそのような方針を立ててそのプランを実現させたことがこのプロジェクトの凄みであるし、20年にわたって成功を収めてきた要因である。今でこそ文部科学省もそのようなことを言っているようだが、20年前に学校復帰を目指さない方針を立てた熊本市教育委員会は文部科学省より20年進んでいると言ってもよい。熊本市教育委員会という公的な機関が公的な事業として「学校復帰を目指さない」という方針を立てたことが先見の明があることで、そこには、真の不登校支援とは学校復帰を目指さないでもいいという信念が感じられるし、もしかしたら、度胸があっただけなのだろうかと思えるほどの凄みすら感じられる。

この20年間でユア・フレンド事業は多くの人々に知られるようになった。大学入試の面接で受験生に熊本大学教育学部を志望した動機を尋ねると、「ユア・フレンドをやりたいから」と答えたりする人がかなりいる。（面接でそのような答える受験生がたくさんいるわりには、実際にユア・フレンドをやる学生は少ないような気がするが、それは気のせいなのだろうか。）あるいは、他大学の先生に、「熊本大学は、不登校支援で有名ですね」と言われたりしたことも何度かある。最初、私は、自分の知らないところで不登校支援をしている熊本大学の先生がいるのかと思ったのだが、よく聞いてみるとそれがユア・フレンドのことであり、ユア・フレンドの知名度に今さらならながらびっくりしたこともある。しかし、知名度はあるものの、このプロジェクトの真骨頂である「学校復帰を目指さない」という考え方が果たしてどこまで理解されているかについては、疑問である。このプロジェクトを知らない人に「学校復帰を目指す活動ではない」という説明をすると、みんな、一通りは分かったような顔をしますが、「よく分かります。でも、やっぱり、学校は行った方がいいですよ」等という返答をされて、一気に力が抜けていったよう苦い経験も私は何度もしているのである。思えば20年前「学校復帰を目指さない」という方針に学校現場が賛同してくるかどうかも分からず、そのような方針の活動に意義を感じてくれる不登校児童生徒がいるかどうかも分からず、そのような方針の活動でホントにボランティア学生が集まるのかどうかも分からず、先見の明と信念と度胸だけで始めたプロジェクトは20年かけてここまで成長した。しかし、まだ、道半ばである。20年後もユア・フレンド事業は続いているであろう。その時には、学校復帰を目指さないという方針が常識となっているという社会が実現した時こそが、このプロジェクトのミッションが完了した時であろう。

「ユア・フレンド事業」に関わって思うこと

熊本大学大学院教育学研究科 シニア教授 杉原哲郎

令和2年度文部科学省調査では、小中学校における不登校児童生徒数は、全国で約19万人を越す状況にあり、熊本市においても、熊本市教育委員会、各学校現場を中心に様々な不登校対策に取り組まれています。

その中でも不登校児童生徒理解という視点からアプローチしている「ユア・フレンド事業」は、全国にも類を見ない取り組みです。

この事業は、熊本市教育委員会と熊本大学教育学部が連携して実施している事業で、いよいよ20周年を迎えます。あらためまして、各学校の先生方、熊本市教育委員会、熊本大学教育学部、附属教育実践総合センター等、関係者の皆様方のご尽力に、深く敬意を表します。

ご承知のように本事業は、大学と教育行政とが連携して取り組むという点で全国から注目を浴びてきました。

僭越ながら私も、平成26年度まで熊本市教育委員会事務局員として、それ以降は熊本大学教職大学院教員として本事業に関わらせていただいておりますが、注目すべき点は、大学と教育行政の連携事業ということだけではありません。

本事業は、「不登校解消対策事業」でなく、不登校児童生徒の子ども理解を中心に据えた「大学生による不登校児童生徒支援事業」であり、何より注目しなくてはならないことは、本事業の「目的」と「活動」にあると思っています。

本事業の「目的」は、児童生徒と年齢の近い大学生を不登校児童生徒の学校や家庭に派遣し、大学生が話し相手・遊び相手となることで、子どもたちの心の居場所をつくることです。

決して不登校児童生徒の学校復帰を目指したり、不登校の児童生徒数を減らしたりすることを「目的」とはしていないのです。

そして、その「目的」を踏まえ、大学生が、「お兄さん、お姉さん」として、不登校児童生徒の心にそっと寄り添い、話し相手・遊び相手になるという、大学生しかできない「活動」なのです。

どうか今後とも、熊本大学教育学部・附属教育実践総合センター、熊本市教育委員会、各学校の先生方が、この「目的」・「活動」をしっかりと理解・共有し、それぞれの役割を果たしていくことで、「ユア・フレンド事業」が、不登校児童生徒の子ども理解を中心に据えた「不登校児童生徒支援事業」として、更に充実・発展することを心より願っております。

ユア・フレンド事業について

教育学部附属教育実践総合センター 特任教授 中野浩幸

ユア・フレンド事業創設20周年に際し、心よりお祝いを申し上げます。

この事業は平成14年の4月から、熊本市と本学部の共同で取り組みが始まりました。

当時の不登校対策は、不登校になった子どもを学校へ復帰させることを目指していましたが、本事業は、子どもと年齢の近い大学生が、不登校の子どもたちの話し相手、遊び相手となることで、子どもたちの心の居場所づくりを行うことを目的としました。

この20年間の取組により、多くの子どもたちが大学生と触れ合い、心を癒し、社会とのつながりを持つことができました。長きに渡り事業が継続した背景には、熊本市教育委員会および大学関係者の皆様方の学生に対する支援と何より大学生の献身的なサポートがあつてのことだと思えます。

そのご苦労に対して、敬意を表します。

さて、私は昨年度まで勤めていた小学校で、不登校問題について、全職員で取り組みました。成果もありましたが、うまくいかず悩むことも少なくありませんでした。そんな時、本事業のような取組が、熊本市以外でもあればと考えました。

本年度、現在の職につき、本事業と関わることとなりました。関わりを深める中で、この素晴らしい取組を熊本市以外の地域に広めたいという思いが強くなり、大学の教育実践総合センター統括会議の場、さらに事業の創設に関わられた方々に相談を行いました。

まず、初めに行ったのはニーズの把握です。そもそも学生派遣に対する学校側のニーズがあるのか、いくつかの市町教育委員会を訪問し、聞き取りを行いました。どの教育委員会も不登校問題解決を重点課題として位置づけ、真摯に取り組まれており、学生派遣のニーズはとても高いことが分かりました。

次に、本事業創設等に関わられた熊本市教育委員会の関係者から、事業創設に当たっての経緯を聞き取ることが大切であると考え、面談をお願いしました。お話を伺うことで、改めて創設までのご苦労を共有することができました。

その後、熊本市総合支援課長、教育相談室長のお二人に、地域を拡げていくことの必要性を説明させていただき、ご快諾をいただきました。

その結果、本年度（令和3年度）は、先行的な取組として、益城町の適応指導教室に学生を派遣することができました。子どもたちは学生が来ることをとても楽しみにしていました。大学生と個別に話をしたり、寄り添っていただいたりしたことで、自分の居場所を見つけた子どもの姿が見られました。学生も、不登校傾向の児童生徒への接し方を益城町の支援員（元養護教諭）に尋ねながら、自分なりの解決方法を模索していました。

今後の課題として、本事業に参加する大学生を増やすことと捉えています。多くの大学生にこの事業を知ってもらい、熊本市以外の市町村にも足を運んでいただきたいと考えます。

本事業は、不登校の子どもたち、大学生、学校、地域社会にとってとても価値あるものという強い思いを私は持ちました。この事業を通して、子どもたちの可能性をさらに伸ばすことができれば素晴らしいと考えます。

20周年を迎えた本事業が、さらに継続していくことを祈念して、お祝いの言葉といたします。

ユア・フレンド活動と特別支援教育

熊本大学大学院教育学研究科 准教授 菊池 哲平

ユア・フレンド事業20周年、誠におめでとうございます。この間に本事業に携われました熊本大学並びに熊本市教育委員会の関係各位、またユア・フレンドとして活動されました熊本大学教育学部の学生・卒業生の皆さまに心より敬意を表します。

ご存じの通り、現在の小・中学校における喫緊の課題として特別支援教育の充実があります。特に発達障害のある児童生徒については、子ども達の学習や生活の様々な場面においてきめ細やかな支援が求められています。発達障害のある子どもの中には不登校になるケースが数多く見受けられ、学校内だけでの対応では難しいことが多いのが実状です。ユア・フレンドはそのような不登校の発達障害児に対しても、保護者や学校現場の先生方と連携を取りながら、彼・彼女らの困り感に寄り添って支援を行っています。他者とのコミュニケーションや集団生活に困難がある発達障害児にとって、その心情を受けとめると共に「少し年上のお兄さん・お姉さん」が話し相手・遊び相手になることが何物にも代えがたい体験になっているのだと思います。

「発達障害児への支援」というと、本人に対してソーシャル・スキル・トレーニングを行って社会性を向上させる、環境調整を行って情緒的な安定をはかるなど、専門的な見地からの支援方法が数多く提案されています。そうした取組が学校内外で継続的に行われて本人の健やかな成長を促すことが重要であることは間違いありませんが、それらの取組の前提として「あたたかい人間関係を醸成すること」がなければなりません。発達障害児が“信頼できる人物”が身近にいることが様々な支援の基盤となり、各種の支援の手立てが効果を示すようになります。ユア・フレンドの存在が発達障害のある子どもの成長を支えているのです。

特別支援教育を専攻している学生も多くユア・フレンド活動に参加しています。専門の学生にとって大学で学んだ専門的な知識や支援法を活用できる生きた実践の場となっているのは言うまでもありません。そればかりか特別支援教育を専攻していない学生にとっても、ユア・フレンド活動は子どもの“多様性”に気づくことができる、とても重要な学びの場になっています。大学の授業で「こども理解」を学んだとしても、それは「森を見て木を見ず」ということになりかねません。「不登校」と一括りにされる子ども達も、不登校になった経緯や現在の状態はもちろん、性格や家庭環境、好きなもの苦手なことなど、一人として同じ子どもはいないのです。ユア・フレンドとして家庭や学校に派遣されて出会う子どもは「不登校児」ではなく「〇〇さん」「□□くん」という唯一無二の存在です。一人ひとりの子どもと向き合う中で子どもの多様性に気づき、個を大事にする視点として「木を見る」ことができるようになること、まさにそれが特別支援教育の視点であり、これからの学校教員として根底にあるべき態度・資質になるのだと思います。

特別支援教育の推進、発達障害のある子どもの成長を支えるという意味においても、ますますユア・フレンド事業の意義は高まっていくものと思われまます。

かけがえのない出会いと豊かな時間

熊本大学大学院教育学研究科 准教授 本吉 大介

ユア・フレンド事業の20周年記念ということで、この事業が20年続いているということをどのように受けとめたら良いのだろうかと思いながら書き始めました。不登校の状況があることと不可分な事業だからです。

この事業を通して大学生と出会えた子どもたちは、不登校の状況にあるからこの機会に巡り合ったこととなります。そして、教員を志望している大学生が家庭や学校で子どもに会っています。この出会いのきっかけにあるのは不登校という状況なので、何か大きな社会問題を背負ったような感覚が学生さんにはあるように思います。学校で学ぶ以外の全く別の目的があって学校に行っていないということであるならば、ユア・フレンド事業を活用するニーズもないと考えられます。だからユア・フレンド事業がきっかけにある出会いには、やっぱりどこかしら“補う”とか“支援”とかそういうものの気配を感じざるを得ないと思うのです。

「自分でいいのだろうか?」「自分に何ができるのだろうか?」「このままでいいのだろうか?」きっとそういう不安や迷いを抱えながら活動に向かう方も多いのではないかと思います。どういう背景があってそうなるのか明確にはわからないのですが、“何かサービスを提供しなければならない”、“何か状況を変えなければならない”といった類のプレッシャーが生じるようなのです。上に述べたような背景要因はきっと関わっているのだろうと思います。

この妙な気負いは、見方によってはとても不思議なのです。自分自身の大学生活の限られた時間を子どもと過ごすことに使うだけでも有難いのですが、休日の時間を使って研修を受けて、心配りの質を高めて子どもに会いに行こうというのです。さらには、子どもと一緒にいない時も子どものことを考えている。この心遣いの尊さに私は感動しております。本当は“感動”と書く前に“感謝”と書いたのですが、私に感謝されてもよく意味がわからないと思ったので“感動”に書き直しました。でも、“関係している”という自覚があるから“感謝”したい気持ちにもなるのです。

では、学生の皆さんは“感謝”されたいから子どもたちに会いに行っているのでしょうか。そんなはずはなく、子どもたちに会いに行く意味は学生の皆さんが自分で見出しておられるはずです。だから私の“感動”と“感謝”は片思いなのですが、こうして表現する機会が与えられてありがたいことです。

さて、先ほどプレッシャーを感じる必要はないというように受けとれることを書きましたが、それも私が推奨したり示唆することでもありません。「自分の力を尽くしたい」、「この出会いを通して自分をもっと良くしていきたい」という自己実現に向かう動機によって生じていると思うからです。だから、ユア・フレンド事業を通して出会う子どもと学生さんは一緒に成長しようとしているパートナーというか、コンビというか、ピアというかそういう並び立つ関係性だと思います。

外野の大人がこんなことを小難しく考えてブツブツ言っている一方で、活動している子どもと学生さんはノビノビと豊かな時間を共有していると思います。その豊かさの感覚の源は説明しにくいと思うのですが、きっとそれが良いんだろうと思います。無邪気に過ごしてほしいなと密かに思っています。

ユア・フレンド事業20周年に寄せて

熊本市教育委員会総合支援課教育相談室長 田 上 潤一郎

まずは20年目を迎えたユア・フレンド事業を支えてくださっている登録学生の皆様、そして全面的なご理解とご協力をいただいている熊本大学教育学部の関係各位、他に例を見ない画期的な事業がスタートして20年、今もなお、多くの子どもたちの支えとして活動が継続しているのは、皆様のご尽力があるからに他なりません。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

以前勤務していた学校に、諸事情により1学期途中から登校できなくなった児童がいました。電話連絡、家庭訪問等、担任を中心に何とか関わろうと試みたり、関係機関と連携しながら対応に当たったりするものなかなかうまくいかず、万策尽きたという諦めに近い雰囲気が漂い始めた頃、最後の一手として話題に上がったのがユア・フレンドの活用でした。学生の来校初日に児童が登校することはなかったものの、それを想定していた学生は、児童への手紙を準備してくれていました。手紙の効果でしょう、これまで長期間にわたり欠席が続いていた児童が、保護者による送迎付きではあったものの翌週の学生来校日に顔を出し、それ以降は学生がやってくる週に一度、約束の時間に必ず登校するようになったのです。しかも自分の足で。自然に寄り添ってくれる学生に完全に心を開いた児童は、それまでに見せたことのない晴れやかな表情を見せるようになりました。私はその時、一教職員として、ユア・フレンドのすごさを目の当たりにしたのです。

教育相談室に赴任し、早いもので間もなく1年が経とうとしています。新型コロナウイルス感染防止の観点から家庭派遣を休止して2年目ですが、学校からのユア・フレンド派遣依頼は後を絶たず、活用する学校数も大幅に増加しています（第6波の影響により1月以降の活動が減少しているのは残念ですが…）。また熊本大学教育学部と話し合い、11月からは益城町への派遣を新たに開始するなど、近隣市町に対する支援拡大の第一歩を踏み出したところです。学級閉鎖、休校が後を絶たないこの状況にあっても、学校からは「ユア・フレンド学生がやって来る日を子どもはとても楽しみにしている。どうか活動を続けてほしい。」という声が届きます。その度に、この事業が子どもたちにとってどれだけ大きな存在なのか改めて痛感しています。今年度は、事業開始から20年という大きな節目ということもあり、TVや熊本市教育委員会主催のKumamoto Education Weekでの紹介等、ユア・フレンドにゆかりのある方々の映像を交えながら振り返る機会がありました。他県出身のある学生は、高校時代にユア・フレンドという活動があることを知り熊本大学教育学部を受験したと話し、またある教職員は、大学時代にユア・フレンド活動に参加したことで厳しい状況におかれた子どもたちとのかかわり方を学び、それが今の学級経営に活かされていると話しました。この活動が幅広く認知され人材育成にも寄与している、これもこの事業の大きな功績だと言えます。

ユア・フレンド事業が活動を開始した20年前、600人程度だった熊本市の不登校児童生徒数は、昨年度初めて1,500人を超えました。増加傾向に歯止めがかかる気配はありません。これまでの20年がそうだったように、これからの20年もまた、子どもたちを取り巻く状況は私たちの想像をはるかに超えていくことでしょう。それに伴い、ユア・フレンドの役割もさらに大きくなるはずです。熊本大学教育学部と熊本市教育委員会が協力し、時代の変化に柔軟に対応しながら子どもたちの力になり続ける、そんな活動を今後も目指していきたいと思えます。

ユア・フレンド事業20周年に寄せて

熊本市教育委員会総合支援課教育相談室指導主事 田 平 拓 也

ユア・フレンド事業20周年という大きな節目の年に赴任してまいりました。担当者としての立場でユア・フレンドの素晴らしさを感じる日々を過ごしています。

まず、現場の先生方から「ユア・フレンドさんと本当に楽しそうに話していますよ。我々職員にはあまり話してくれない生徒なのですけど…苦笑」「ユア・フレンドと会う日だけは、必ず登校していますよ。しかも15分前には。本当にありがたいです」など多数の感謝の声を電話で聞くことができます。

ある小学校における打合せの際のエピソードを紹介します。長い間学校を休みがちで、最近1カ月は家からも出ようとしなくなったという児童が対象でした。担任の先生は「家庭訪問や電話をしてもなかなか会話ができません。今日も来てくれるかどうか…」と心配しておられました。おまけに学生も新規のユア・フレンドでガチガチの様子です。私も内心このマッチングは大丈夫なのかと不安がよぎりました。しかし、対象の児童は保護者と一緒に3学期初の登校をし、ユア・フレンドとの対面ができました。初めは緊張の面持ちでしたが、韓流アイドルの話が始まると止まらなくなり、帰りにはお互い名残惜しそうに「また来週ね～」と手を振って別れました。出会いの機会が、子どもを笑顔にしました。このような劇的な場面が熊本市のいろいろな小中学校で見られているのです。しかも20年間。

ユア・フレンドは学校打合せの際に、子どもに手紙を書いてきてくれます。子どもの好きなキャラクターを描いたり、シールやマスキングテープを駆使して装飾したり、自己紹介や心温まるメッセージを添えたりと、そのセンスの良さに毎回感心します。手紙を開いた時の児童生徒のパッと明るくなる表情を見るのがいつも楽しみです。

ユア・フレンドの表情も様々です。打合せ前には「緊張しています…」「どんな子どもさんですかね…」「会話が弾むかどうか…」などの不安の声も漏れることもあれば、「まずは自分が楽しみたいです」「教育学部の学生はぜひやった方がいいと思っています」などの頼もしい声も聞かれることもあります。また出身地の話をすることも多いのですが、「自分の地元の大学にはユア・フレンドのような活動はないので、熊本大学を選びました」という学生が何名もいました。本当に素敵な学生ばかりです。ぜひ、立派な教師や社会人になってほしいと願っています。

課題は、登録学生の確保です。平成26年度の191名から減少傾向にあり、令和3年度は129名の登録でした。不登校児童生徒の増加が続く学校からの派遣依頼に対し、ユア・フレンドの稼働率が高くなり、3学期には新規派遣が難しくなったという現象が起きてしまいました。市教委や大学からの勧誘だけではなく、学生間での声掛けも促しているところです。1月には、熊本大学教職大学院生の講義に入らせていただき、ユア・フレンド活動の紹介と勧誘を行いました。今後も積極的に連携を図っていき、事業の活性化を図りたいと考えています。

最後に、これまで20年の歴史を繋いでくださったユア・フレンドの皆様、熊本大学教育学部の関係各位、事業の立ち上げから活動を見守ってくださった皆様に感謝を申し上げます。

ユア・フレンド事業20周年に寄せて

熊本市教育委員会総合支援課教育相談室 中原裕子

ユア・フレンド事業が20周年を迎えるという大切な節目に担当として学生と関われることを幸せに感じております。

ユア・フレンドの依頼は「キャッチボールをしてほしい」「ゲームを一緒にしたい」「イラストを描いてほしい」など様々な声とともに学校から書類を通してこちらに届きます。

私は要望をもとに学生にメールで依頼をします。私からの依頼が威圧的なのか、ほとんどの学生は快く活動を引き受けてくれます。ありがたいことです。しかも子どもの要望に限りなく応えようとしてくれます。イラストが得意でなくても練習してくれますし、ゲームに詳しくなくても子どもから聞いて理解してくれようとしています。ユア・フレンド学生のこうした努力のおかげで、子どもと学生の「マッチング」がうまくいっているのです。

ある時「私は人見知りするのですが、ユア・フレンド活動できるでしょうか・・・」と自信なさげに話す学生が打ち合わせに来ました。確かに自分からどンドン話すタイプではなく「おとなしい人」という印象の学生でした。

しかし、その学生はしっかり話を聞いてくれ、柔らかい雰囲気微笑んでくれる方でした。私は「大丈夫ですよ」と本人に伝え活動が始まりました。

結果的にはその学生の穏やかな感じが心地良かったようで、子どもは喜んで活動に来てくれました。子どもが楽しそうだと学生も自信がついていき、1年ほど続いた活動が終わる時には「子どものために何かしたい、力になりたいとユア・フレンド活動を始めたが、子どもと会うのはとても楽しくて、毎回元気をもらっていました。力をもらったのは私の方でした。」と話してくれました。

一方、子どもが活動に来ない、会えないといった活動をしてきている学生もいます。毎週、家まで行くけれど、子どもが部屋から出てこずに会えないまま手紙だけを残す活動を続けてくれた学生がいました。2ヵ月ほどたった時、いつものように家に行くと突然子どもが出迎えてくれたそうです。その子どもは「最初は知らない人だし会うのが怖かった。手紙も読んでいたけど、どうせすぐ来なくなるだろうと思っていた。でもずっと手紙をくれたし、いろんなことが書いてあって、どんな人か会ってみたくなった。」と話してくれたそうです。「途中で活動をやめようと思ったけれど諦めなくて本当に良かった。」と学生は嬉しそうに話してくれました。

ユア・フレンド活動に正解や不正解はないと思っています。また活動は子どものためだけではなく学生のためでもあると確信しています。

晴れの日も雨の日も、暑い日も寒い日も、自転車に乗って、バスに乗って大好きな子どもに会いにしてくれるユア・フレンド学生の皆さん、本当にありがとうございます。

今後もたくさんの学生がユア・フレンドに登録し、そしてますますユア・フレンド事業が発展することを心から願っています。

ユア・フレンドから

ユア・フレンドで得たもの

熊本大学教育学部小学校教員養成課程 3年 佐伯 凌太

「不登校や別室登校の子どもたちと遊ぶことができる」その言葉に惹かれた私がユア・フレンドを始めて丸2年が経とうとしています。日々の活動の中で子どもたちと向き合い、得たものはたくさんありました。

私は中学生の頃から小学校の教師になることが夢でした。教育学部に入学したら、たくさん子どもたちと関わりながらその夢に近づいていこうと胸を膨らませていました。そんな中で2年生の春にユア・フレンドの募集案内を受けて「僕が求めているのはこれだ！」と思い、満を辞してこの事業に参加することにしました。最初の活動の案内が来たのは登録した年度の12月で、校内派遣という形で市内の中学校に行くことになりました。緊張と期待感を持って足を運んだ初日の活動を今でも鮮明に覚えています。

はじめの頃は子どもたちをどう理解していこうと身構えていたのですが、実際に一緒に遊んでみるとそんなことを気にする必要はあまりなくて、ただその子と楽しく遊ぶだけの時間にしてもらいたいんだと気付くようになりました。私の場合は、固定して遊ぶ子は決まっていなかったのですが、その日の状況によって遊ぶ子や活動内容が違っていました。それは嬉しいことではあったのですが、その反面「その場限り感」を持ってしまうため、活動日を重ねていくうちに「この時はこうすればいいんだ」と遊び方や関わり方のパターンが自分の中で決まっていくようになりました。すると毎度同じことを繰り返しているような感覚になり、活動に対するモチベーションが少しずつ減っていくようになったのです。「子どもと関わる仕事を目指している自分が、子どもと遊ぶことに楽しみを感じなくなっている」ことに気付き、だんだん焦りと罪悪感を抱くようになりました。ちょうどそんな時に活動に参加している学生同士の意見交換会という機会がありました。私は冷たい視線を浴びる覚悟でグループ対話の時間にその悩みを打ち明けました。すると驚くことにそこにいたメンバーのほとんどが私と同じような悩みを持っていたのです。心がとてもホッとしたのと同時に、そこから抜け出すための改善策を話し合った結果、何よりも自分が楽しむことを大切にしようというように活動に対する意識が変わるようになりました。

そこからは「何をしようか？」ではなく「これをやろうよ！」と自分発信で声かけをするようになり、遊びに本気になるようになりました。すると子どもたちの笑顔が以前よりも多く感じるようになり、先生方からも感謝のお声をいただくこともありました。現在ではその中学校を継続しつつ、新しく小学校でも活動を行っています。新しい環境に身を置くことで、今まで以上に自分の役割の大きさを感じるようになりました。先生を目指す身ではありますが、一緒にいる子以上にまず自分が楽しもうとする姿勢はそのままにしています。そうしていると、たまに子どもたちから先生には言えないようなことをポロッと耳にすることがあります。その瞬間に触れるたびに私はたまたま嬉しくなり、これこそが大学生だからこそ、そして私だからこそ果たせる役割なのだと感じます。そんな宝物のような瞬間をたくさん経験することができるように、今の私が楽しいと思える純粋な気持ちを子どもたちとぶつけ合っていきたいと思います。

ユア・フレンドにこれから登録しようか考えているみなさん、将来に学校現場で働くかどうかは関係なくぜひ参加してほしいと思います。子どもたちは一緒に遊んでくれるお兄さんお姉さんがいるだけで生活の中に希望が生まれます。そしてその時間は私たちにとってもかけがえのないものになると思います。大学生という特権を最大限に使って1人でも多くの子どもたちとそのような機会を味わってもらえれば私にとっても嬉しいです。

教職について顧みるユア・フレンド事業

熊本市立託麻北小学校教諭 金子裕美

教職に就いて9年目、今までたくさん子どもたちに出会い、どんな関わり方をしたらいいか、日々悩み、考えてきました。関わり方について深く考えるようになったきっかけの1つに、学生の頃経験したユア・フレンド事業があります。

私はユア・フレンドの家庭派遣を2年間経験しました。派遣先では、折り紙を折ったり、絵を描いたり、犬や猫と遊んだり、ピアノを弾いたりしました。その子がやりたいと思ったことを一緒にし、私も楽しむようにしました。

教師を目指す教育学部の学生だからこそ、「この子はそのまま学校に行かなくても大丈夫なのだろうか。」と考える日もありました。ユア・フレンド事業の「学校復帰を目指さない」ということと自分の思いの中にジレンマが芽生えることもありました。そのような中で、約束していた活動日に、その子と会えないということが出てきました。次に会う約束をするときには「来週また会おうね。」「またこの話の続きをしようね。」と楽しそうに話していたとしても、その日になるとベッドから起きられなかったり、部屋から出て来ることができなかったりなど、その日の調子が良いときと良くないときがある様子でした。「人と会うエネルギーが足りていない状況」という、その子のお母さんから聞いた言葉が今でも忘れられません。

その子と会えないときにも、手紙を残したり、話し声だけでも聞ければと思ってお母さんとお話をしたり、どんな形であれ関わりを持てればと思いながら活動を行っていました。不登校であると、一日中家にいたり、部屋にこもっていたりして、外部との関わりが薄い生活ではないかと考えます。そんな毎日の生活の中で、週に1回会いに行く約束をして、あなたを訪ねてきたよ、と伝える存在は、そのような毎日にちょっとした変化をもたらすことになり得ると思います。「関わりを閉ざさないようにすること、関わり続けることが大切」ということを、ユア・フレンド活動から学ぶことができました。

この思いは、教職に就いた後にもずっと根底にあります。担任している子どもが学校を休んだ時には、配布物を入れるための封筒に手紙を書いたり、クラス子どもたちにも手紙を書いてもらったりして、届けるようにしています。「学校には、あなたを待っている人がいるよ。」と伝えるために、欠かさないようにしています。

登校したいけど登校できない子ども、友達と話したくても話せない子どもなど、ユア・フレンドのお兄さん・お姉さんとの出会いを待っている子どもたちがたくさんいます。ユア・フレンドとして活動していく中で、子どもたちとの関わり方で悩むこともあるかもしれませんが、学生のうちからこのような子どもたちと出会うことができるユア・フレンド活動では、きっと自分の糧となるような経験を積むことができると思います。ぜひ、自信をもって子どもたちと関わり続けてほしいと思います。

最後に、学生時代にユア・フレンドとして貴重な経験させて頂いたことを、心より感謝しています。ユア・フレンド事業のさらなる発展を祈っています。

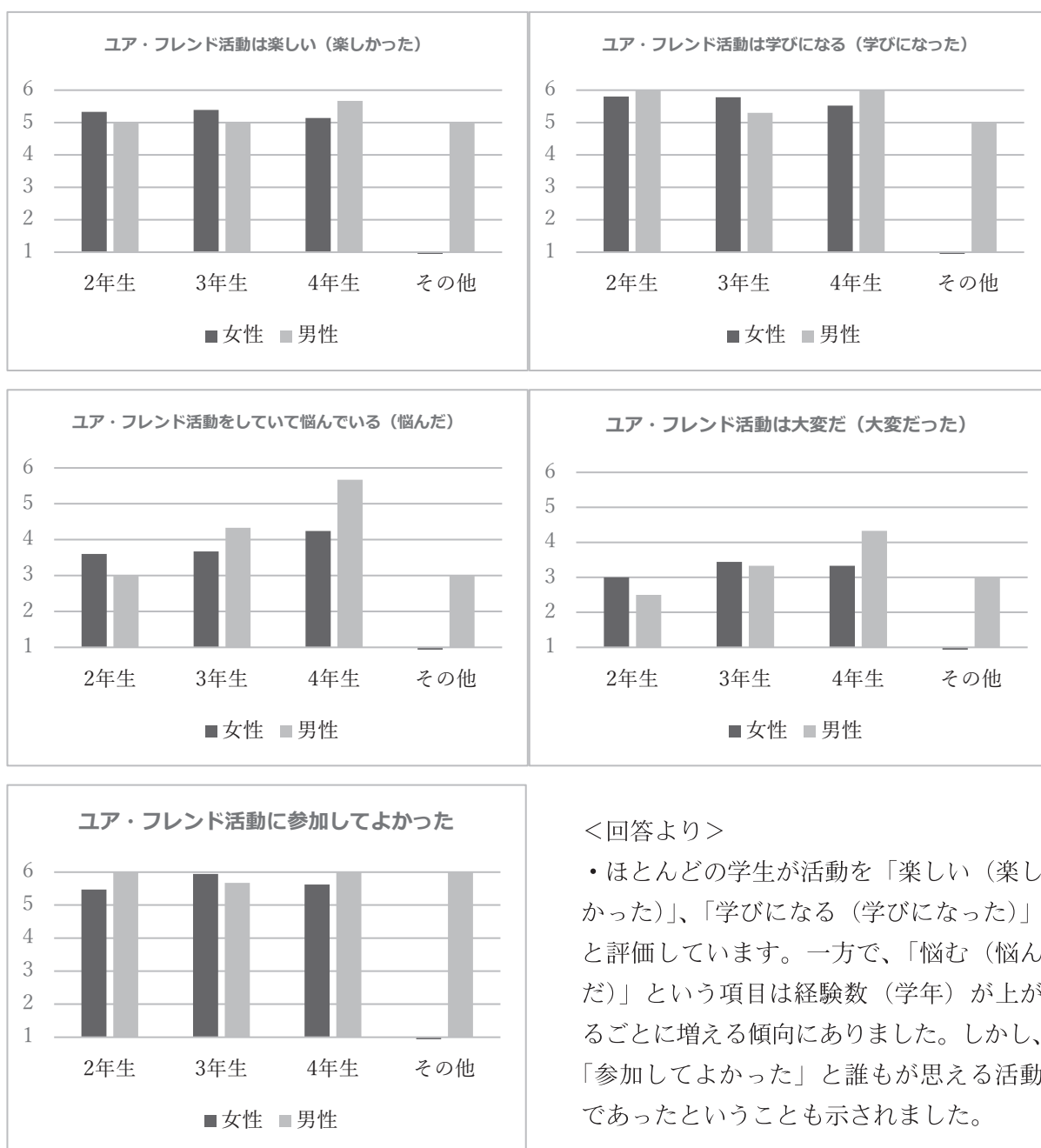
ユア・フレンド学生へのアンケート調査

ここでは、20周年を機に現役でユア・フレンド活動を行ってくださっている学生たちに協力して頂いたアンケートの結果をお知らせします。学生たちの思いをご覧ください。

- アンケート回答期間：2022/1/20～2/18
- 回答者総数：63名

アンケート回答者属性			
学年	女性	男性	計
2年生	15	2	17
3年生	18	3	21
4年生	21	3	24
その他	0	1	1
計	54	9	63

1) 6段階評価（まったくそう思わない：1～非常にそう思う：6）による回答の平均値



<回答より>

・ほとんどの学生が活動を「楽しい (楽しかった)」、「学びになる (学びになった)」と評価しています。一方で、「悩む (悩んだ)」という項目は経験数 (学年) が上がるごとに増える傾向にありました。しかし、「参加してよかった」と誰もが思える活動であったということも示されました。

2) 自由記述による回答

問：ユア・フレンド活動で学びになったと思うことについて、自由に述べてください。

(回答数：48)

学年	性別	内容
2年生	女性	ちゃんと話を聞いたり趣味のことを掘り下げたり寄り添うように接したら、心を開いてくれる。
2年生	女性	まだ1人としか関わっていないが、不登校の子どもがどんな毎日を送っていて、どんなことを考えて生活しているのか知ることが出来たこと。
2年生	女性	活動以前に自身が抱いていた“不登校”に対するイメージが大きく変わりました。いろいろな個性のある児童と関わることで、多様な関わり方があることや、また、活動を重ねるごとに児童との関わり方が変わっていくことなど、毎回たくさん学びがあります。
2年生	女性	教室に行けていないからと言って、その子自身に大きな問題があるとかではなく、周りからの刺激を受け取りやすいのかなと思った。
2年生	女性	研修会で、不登校の子に対する姿勢について多くの学びがあった
2年生	女性	子どもに合わせて活動内容を考えることや、子どもとの関わり方を実践的に学ぶことができた。
2年生	女性	私はユア・フレンド活動に参加する前は、不登校の子とどのように関わればよいかあまり分からなかったのですが、実際に活動の中で子どもと関わることを通して、子どもの話にしっかり耳を傾け、積極的に話しかけたり相手のことを理解しようとする態度を示したりすることが大切だと学びました。
2年生	女性	私はユア・フレンド活動を通して、子どもたちと対話することの大切さを学びました。回を重ねて、対話をしていくことでその子が思っていることや悩みなどが見えてくることがありました。いっけん、元気そうに見える子どもでもふとしたときに元気が無かったり、辛そうな表情を見せることもあります。その反対で、悩みがあるけれど、ある場面では生き生きとしている子どもがいます。対話を通して、子どもたちの心の中を正しく適切に覗きながら寄り添うことがとても大切だと思います。この学びは自分が教師になったときに、役立てて行きたいと思います。
2年生	女性	児童の素直な気持ちが何気ない会話や活動の中で表れていることを実感できたことが学びになった。
2年生	女性	自分が想像していたのと違って、たとえ不登校の子でも素直ないい子だということがわかった
2年生	女性	多様な子どもたちがいることを学べた。
2年生	女性	日々の活動でどんな事をしようかと考えることだけでも勉強になります。コロナ禍でも子どもと関わるができるということに感謝して頑張りたいです。
2年生	男性	実際に現場で活動できて、自分の将来に向けての勉強になる
2年生	男性	先生でも親でもない「大人」との関わりは、子どもの心を開くきっかけになりうる
3年生	女性	どうしたらその子に心を開いて貰えるかを考えること。
3年生	女性	学校という現場を見る機会が増える
3年生	女性	現場には様々な児童がおり、一人一人適した対応が違うこと。子どもの成長の速さや、発達段階について。
3年生	女性	子どもたちと話すことが本当に楽しい。話してみないと分からないことがたくさんある。

3年生	女性	子どもと関わる機会があまりなかったので、ユア・フレンドで子どもと実際に関わり、実態を知れること自体がとても有意義な学びになっています。また、接し方や対応の仕方等で難しさを感じ、悩むこともありますが、管理職や養護の先生に相談しながら、その子にとって1番いい方法を考える中で様々な学びもあります。
3年生	女性	子どもと関わる中で何に悩んでいて、どんな学校生活が望ましいのか考えることができる。
3年生	女性	子どもに対する大人としての立場、振る舞い方を学ぶ場になっています。塾などのアルバイトをしていないとなかなか身につくことでは無いと思うため、貴重だと感じます。
3年生	女性	自分から心を開いて、時間をかけて関係を作る大切さや、子供の興味関心に合わせて手立てを打つことの大切さを学びました。最初は盛り上がりなかった活動も、工夫することで活動に熱中してくれたり、色んな話を子供からしてくれるようになったりして、とても嬉しかったです。養護教諭を目指す上で、共感的に聴く姿勢も身についたのではないかと思います。
3年生	女性	中学生という思春期の生徒がどのような悩みを持っているのか、養護の先生に聞くことが出来、ためになった。
3年生	女性	不登校の子どもたちに対するイメージや自分の気持ちが前向きなものに変わりました。また、不登校の子どもたちと関わって行く中で、自己開示をしたり、明るい表情で話すことで、子どもたちが親しみを感じてくれたり、心を開いたりしてくれるとわかり、教師になった時も活かしたいと思いました。
3年生	女性	不登校の子に対するイメージが変わった。学校の現状を知れて勉強になった。
3年生	女性	不登校の背景は人それぞれであると思った。
3年生	女性	不登校傾向にある子どもと1対1で話す機会はなかったため、その接し方や子ども自身がどんなことを考えているかを知ることができた。
3年生	女性	不登校児の実態についてや保護者と学校の連携も学べたこと。また不登校児にはどのような対応をすれば良いのかを学べた。
3年生	男性	子どもたちとの関わり方や、子どもたちを何を必要として、自分に何をできるのかを見つけることができた
3年生	男性	不登校の子への接し方をかなり考えて行っているため、今後の参考になっています。また、私は複数の子どもと関わっているため、個人に応じた接し方という面でも学びになっています。
4年生	女性	その子との関わりはもちろん、保護者さんや兄弟と関わることでよりその児童の理解につながった。
4年生	女性	なかなか活動できませんでしたが、研修会などでみなさんのお話を聞いたことで学びになりました。
4年生	女性	一人ひとりの子どもに合わせて活動内容を工夫したり、会えなくても手紙を渡して少しずつ関係を作ったりする中で、子どものことを1番に考えて行動することや根気強く関わることの大切さを学びました。
4年生	女性	学校で先生方ともお話する機会があってよかったなと思います。
4年生	女性	子どもたちとの接し方や子どもたちが抱える悩みを学べたこと
4年生	女性	子どもたちに対して一対一で真摯に向き合う経験を積むことができました。先生でも親でもない立場で、ただひたすらその子と何を話したら、なにをしたら楽しいかなど考えることを学生のうちに経験できてよかったです。

4年生	女性	子どもとのコミュニケーションの取り方
4年生	女性	児童との関わり方、学校現場や保護者の考え方、意見交換会などでの不登校児童生徒に対する考えや見方
4年生	女性	時間をかけて子どもと信頼関係を築くことで、少しずつ心を開いてくれていると実感する場面があり、焦らず、時間をかけて子どもと向き合うことの大切さを学んだ。
4年生	女性	実習など違って、子どもたちにより向き合うことができる。色々な子どもがいたり、その背景も様々だと知れた。また先生方の関わり方も多様だと知った。
4年生	女性	相手の立場から物事を考えようという意識が強くなった。
4年生	女性	不登校の子どもたちの実際を知ることができ、且つその子達の困り感や家庭状況などを教員という立場ではなく知ることができたこと。
4年生	女性	不登校の子どもたちをこの目で見て、実際を知ることができたのがとても大きかったです。どんな特性や背景を抱えているのか、学校のどんなところが苦手なのかなど、様々な実情や思いを知ることが出来ました。また、学校に行けないながらも、子どもの生き生きとした様子や一生懸命な姿も垣間見れ、よりいっそう、現場に出てからも不登校支援に携わっていきたいと思うようになりました。子ども一人ひとりをよく見てあげることや受容・傾聴・共感の姿勢など、養護教諭として大切なことも、子どもとの実際の間わりを通して学ぶことが出来たと思います。ユア・フレンド活動は、座学では学べないことを自分の身をもって経験できる貴重な機会でした。
4年生	女性	不登校の子どもと接する機会はあまりなかったため、関わり方等勉強になりました。現場の先生方と話をすることができる点も、学びになったと思います。
4年生	女性	話を聞く姿勢
4年生	男性	不登校の児童生徒の心に寄り添うことの大切さを強く感じました。
4年生	男性	複数名の子どもと関わらせていただくなかで、その子にあったアプローチがそれぞれ違うということから、その子にとってより良い方法(話し中心か、活動中心か、など)を考えるという点で学びになりました。
その他	男性	不登校または別室登校の児童生徒と、学生のうちに話す機会があったこと、一緒に遊ぶ経験ができたこと自体、とても学びになりました。特に卒業後教員になる人はより一層その思いが強いと思います。ユア・フレンド活動を通して、子どもの気持ちや子どもの言動の理由を頭で考えることができるようになりました。これまでなんとなく、「嬉しそう」「楽しそう」な様子だと感覚的に理解していました。しかしその先にある「どうしてこの子は今楽しそうにしているのだろうか」「どんな言葉掛けや接し方がそれらをもたらしただろう」などといったことをユア・フレンド活動を通して頻繁に考えるようになり、教員に必要な資質能力が少しだけ身についたように感じます。

問：これからのユア・フレンドについて課題（改善した方がよい）と思うことがあれば、自由に述べてください。（回答数：20）

学年	性別	内容
2年生	女性	活動の中で、おしゃべりだけだと時間が余るので、制作活動をすることがある。制作費についての支援も市教委のほうからあると助かる。子どもの方も、ユア・フレンドがお金を出しているのを気にしている。
3年生	女性	学校との連携が難しく感じます。学校によって不登校の子どもにたちへの関わり方が違うので、学校の先生方も忙しいとは思いますが、活動の様子をもっと積極的に聞いたり、子供についてや活動の内容など相談に乗ってくれるともっと連携がとれて活動が充実したものになると思います。
3年生	女性	掛け持ちの場合、ペースを2週間に1回ほどに減らして欲しい。
3年生	女性	最初の頃は活動内容に悩んだため、活動はじめの学生には具体的な活動例を提示するとよいと感じる。ユア・フレンドと学校の要望に齟齬が生じることがあるため、定期的にすり合わせを行うと良い。
3年生	男性	もっと対象の子が楽しいと思える話や活動を考えて、実践することです。
3年生	男性	長期的に1人の子を見ることがなかなか少ない
4年生	女性	遠隔での活動が行えると、コロナの感染状況に左右されることもないし、登校に強い不安感を持つ子どもにとっても活動のハードルが下がるのではないかと思います。
4年生	女性	学校によっては、対象の子どもが学校に来ておらず、時間を持て余すことがありました。
4年生	女性	学校によってユア・フレンドへの認識や体制（記録の有無や子どもへの活動日の連絡の仕方等）が若干異なること
4年生	女性	学校現場の先生はやはり、勉強させたり登校させることに重きをおいているので、ユア・フレンドの活動目的とのズレが生まれるのが難しかったです。ユア・フレンドでは勉強は教えない、など学校側に伝えてもらえると嬉しいなと思いました。
4年生	女性	講義との兼ね合いで、なかなか参加することが難しいところがあります。もう少し、依頼元からの活動時間の範囲を柔軟にいただからと参加しやすいと思います。また、はじめて活動に行くまでのハードルが高いので、先輩方が活動しているところを見学に行く機会があれば、より参加しやすいと思いました。
4年生	女性	最初は、何をすればいいかわからないので、活動事例を提示してもらえると、嬉しいです。徐々に自分なりにアレンジしていくこともできると思います。
4年生	女性	参加者が少ないこと
4年生	女性	場所的に活動したくてもできないということが多いのかなと思います。できるだけ多くの学生が活動できるようになると良いなと思います。
4年生	女性	派遣先の学校によっては、ユア・フレンドの活動内容を勘違いされてたり、理解されてなかったりするところがある。 ユア・フレンドを家庭教師のようだと勘違いしてる先生方もいらっしゃるの、学校全体にも理解を促してほしい。

4年生 女性	<p>保護者や学校がユア・フレンドについての理解が浅い場合があることに課題があると考えます。学校によるのですが、授業の参加を求めてきたり、ユア・フレンドとしての活動を越えた活動を保護者が求めてきたりすることがありました。ある程度経験を積んだ学生の場合は断ることも容易だと思のですが、1人ではじめての活動でそのような事態になると非常に困ると思います。そのため、活動を始める前、ユア・フレンドの依頼の時点でユア・フレンドがどういうものなのか、教育相談室の方からも保護者や学校により丁寧に説明していただけたらなと思います。</p>
4年生 男性	<p>コロナの感染が拡大されている状況では、学生個々の判断に任せるのではなく、全体として活動中止などの判断をするべきだと思います。 また、学生同士の意見交換の際は、職員の方が入らずに学生だけで話し合う機会を作るともっと話し合いが活発になると思います。</p>
4年生 男性	<p>学校ごとで使える道具が異なるので、どのような道具があるか事前にわかると準備もしやすいと思います。</p>
4年生 男性	<p>担当の小学校に行ったのに、全く子供と会話できないという事が何度もありました。また、担任の先生のiPadを使ってロイロノートで会話をする場面が多かったのですが、授業で使うかもしれないiPadを借りるのはとても心苦しかったです。これからは、zoomを使って学生が家にいながらも、子どもと会話できるようになったらいいなと思いました。まず最初はzoomで会話し、親睦を深めたあと、段階的に学校で会うような形にすると、子供たちの心理的な負担も和らぐのではないかと思います。</p>
その他 男性	<p>もっと学部生に宣伝したほうがいい。 4月にしか登録できない制度(年度途中にも登録できるようにしてほしい)</p>

問：今後参加する学生に対して伝えたいことがあれば、自由に述べてください。（回答数：31）

学年	性別	内容
2年生	女性	どうすれば良いか悩むこともあるけれど、だんだん楽しく活動できるようになり、とてもやりがいを感じることができると思います！
2年生	女性	ユア・フレンド活動は子どもたちにとっても私たち大学生にとっても、とても学びのある活動です。是非参加してください！
2年生	女性	気楽に楽しむ感じで参加してみるでいいと思います！
2年生	女性	最初は経験値になるな～、程度で参加したのですが、子どもと接して人の繊細さや自分に心を開いてくれて心が繋がる嬉しさや温かさを知れました。参加してよかったと心から思います！
2年生	女性	私は大学生になり、ユア・フレンド活動に参加しなければ、もしかすると教師になるまで小学生と関わる機会はなかったかもしれません。今実際に子ども達と関わる事が出来て、沢山の事を学べるだけでなく、明るい気持ちになる事が出来ます！活動に参加して損はないので、ぜひ参加してほしいです！
2年生	女性	自分の視野が広がるのでぜひ参加してほしいと思う！
2年生	女性	実際に児童と関わることで得られる学びは多くあると思うので、私はユア・フレンド活動に参加して良かったと思っています。
2年生	男性	楽しいよ
3年生	女性	この活動はどんな人にとっても必ず学びになるものだと思います。子どもたちとぜひ、楽しい時間を過ごしてください。
3年生	女性	とても勉強になります。教師をめざしている人、そうでない人もぜひ参加して欲しい活動です。
3年生	女性	教員になりたいと思う人はぜひ参加してほしい。教員にならない人でも子供たちが好きなら参加することをオススメします。子どもと関わるのは楽しいし、ボランティア活動でもあるので学生のうちにできることをぜひしてほしい。
3年生	女性	最初は何をしたら良いのかわからず不安かもしれませんが、心配しなくて大丈夫だと思います。
3年生	女性	私はユア・フレンドに参加して本当に不登校の子どもたちに対するイメージが変わりました。活動は少し大変ですが、学びは多いと思います。活動の参加をお待ちしています！
3年生	女性	時間を大切にしたい。
3年生	女性	担当してる子どもたちがユア・フレンドの日をとっても楽しみにしてくれていると聞いた時の喜びは今でも忘れません！自分にとっても、間違いなく良い経験になります！私は3年生から登録しましたが、2年生からしておけばよかったなぁと後悔してます。そのくらい、ユア・フレンド活動は素敵な事業です！
3年生	男性	とにかく悩んだら行かせていただいている学校の先生やユア・フレンドの担当の方に相談すると良いでしょう。また、聞き出そうとする姿勢も大事ですが、まずは自分のことを知ってもらう方が、相手も親しみがうまれて、自分のことを話そうとしてくれます。
3年生	男性	試行錯誤しながら目の前の子たちとたくさん楽しんでみてください！
4年生	女性	学びになる貴重な機会ですので、ぜひ積極的に参加してみてください。
4年生	女性	わたし自身、大変なことはありましたが、学校の先生方や中原さんのサポートがあり、良い経験ができました。教師になるにあたって、とても良い経験だと思うのでぜひ参加してみてください。
4年生	女性	活動を始める時などは少し思い切りがあるかもしれませんが、そんなに頑張ろとしなくても、自然と子ども達と会話することで自分なりの関わり方が見えてくると思います。

4年生	女性	「責任が重そう」「自分では上手くできなそう」など不安がたくさんあると思いますが、3年間ユア・フレンド活動を行ってきた私から言えるのは、「ユア・フレンド活動はとっても楽しい」ということです。誤解を生むかもしれませんが、私は3年間、私が楽しいからユア・フレンド活動をしていました。上手いかずに悩むことももちろんあります。でもやっぱり子どもと関わって、たくさんお話ししてたくさん遊ぶのはとても楽しいです。みなさんがユア・フレンドとして楽しんでくれる日が来るのを心待ちにしています。
4年生	女性	教職を目指す人はもちろん、そうでない人も、今後に繋がる学びを得られると思います。子どもも自分も楽しいと思える時間を過ごして下さい。
4年生	女性	私は、自分の意見や考えを持ち、それを上手く伝えることが現場においても研修においても大事だと感じました。もし学校現場に関わるのであれば、ユア・フレンドを通してその力をつけるいい機会になるのではと思います。
4年生	女性	私は養護教諭養成課程で教育実習は主に保健室での実習でしたが、それでも不登校の子どもと関わる時間はわずかでした。こんなに一人の子どもとじっくり関われるユア・フレンド活動は、本当に貴重だと思います。講義でも不登校について学ぶことはできますが、子どもを自分の目で見て、直に関わるなかで得られるものはとても大きいです。不登校に対する見方も変わると思います。そしてなにより、子どもたちは本当にかわいいので、ぜひたくさん学生の学生にユア・フレンド活動を通して子どもとの楽しい時間を過ごしてほしいです。
4年生	女性	自分がやっていることが、本当に目の前の子のためになっているのか不安になることもあるかもしれませんが、まずは自分が楽しんでください！大学生が楽しめば子どもたちの笑顔も自ずと増えていきます！
4年生	女性	自分も楽しむことで、それが子どもたちにも伝わっていくと思うので、ぜひ、自分自身も楽しむことを忘れずに活動してほしいと思います。
4年生	女性	悩むことは多いけれど、子どもとの関わりを通して、自身の性格や人間関係も見つめ直すきっかけにもなるので、プラスになることが多いです！また、教員志望の方なら、実習以外で子どもと向き合うことができるので、絶対タメになります！
4年生	女性	明るく笑顔で、その子の趣味を見つけて話しやすい雰囲気を作ってあげてください。その子も心を開いてくれるはずですよ。
4年生	男性	気負わず、話し相手、遊び相手になるという気持ちで臨むとよいと思います。はじめはコミュニケーションが難しい場合もあるかもしれませんが、次第に信頼関係が生まれてくると思います。
4年生	男性	不登校の児童生徒と関わることは大変貴重な経験となるので、たくさん悩んで挑戦してみてください。
その他	男性	大学を卒業してすぐ、教員1日目から不登校や別室登校の児童生徒と関わらなければいけません。しっかりできますか？その子にとって居心地の良い環境を作ることができますか？不安な人はユア・フレンド活動に参加することをお勧めします。講義を受けるよりも勉強になります。

自由記述から、学生たちの率直な思い、ユア・フレンド活動の大きな意義や今後に向けた多くの課題が見えてきました。

回答してくれた学生の皆さん、ご協力頂き誠にありがとうございました。

20周年の活動のあゆみ

ユア・フレンド事業のあゆみ

平成14年2月 熊本市教育委員会と熊本大学教育学部の間で協定締結

平成14年度 登録学生：83人（男子：13人、女子：70人）

- 4月 ユア・フレンド事業開始 事業説明会 参加学生：128人
- 5月 研修会（熊本市教育センター） 参加学生：85人
- 6月 開始当初83人登録
- 8月 第1回意見交換会（熊本市教育センター）
- 1月 第2回意見交換会（熊本市教育センター）
- 2月 熊本大学教育学部附属教育実践総合センターシンポジウム

平成15年度 登録学生：107人（男子：26人、女子：81人）

- 4月 登録証交付式（熊本市教育センター） 継続学生：46人
事業説明会（熊本大学） 参加学生：58人
- 5月 研修会（熊本市教育センター） 参加学生：61人
- 10月 第1回意見交換会（熊本市教育センター）
- 1月 第2回意見交換会（熊本市教育センター）

平成16年度 登録学生：101人（男子：24人、女子：77人）

- 4月 登録証交付式（熊本市教育センター） 継続学生：72人
事業説明会（熊本大学） 参加学生：48人
- 5月 研修会（熊本市教育センターおよび教育学部） 参加学生：39人
- 10月 第1回意見交換会（熊本市教育センター）
- 1月 第2回意見交換会（熊本市教育センター）

平成17年度 登録学生：166人（男子：25人、女子：141人）

- 4月 登録証交付式（熊本市教育センター） 継続学生：42人
事業説明会（熊本大学） 参加学生：113人
- 5月 研修会（熊本市教育センター） 参加学生：92人
- 10月 第1回意見交換会（熊本市教育センター）
- 1月 第2回意見交換会（熊本市教育センター）

平成18年度 登録学生：168人（男子：20人、女子：148人）

- 4月 登録証交付式（熊本市教育センター） 継続学生：99人
事業説明会（熊本大学） 参加学生：73人
- 5月 研修会（熊本市教育センター） 参加学生：49人
- 9月 第1回意見交換会（熊本市教育センター）
- 1月 第2回意見交換会（熊本市教育センター）

平成19年度 登録学生：180人（男子：25人、女子：155人）

- 1月 事業説明会（熊本大学） 参加学生：66人
- 登録証交付式（熊本大学） 継続学生：95人
- 5月 研修会（熊本市教育センター） 参加学生：36人
- 10月 第1回意見交換会（熊本市教育センター）
- 1月 第2回意見交換会（熊本市教育センター）

平成20年度 登録学生：195人（男子：27人、女子：168人）

※ 講義科目「教育臨床体験演習」として単位化

- 4月 事業説明会（熊本大学） 参加学生：89人
- 登録証交付式（熊本大学） 継続学生：88人
- 5月 研修会（熊本大学） 参加学生：80人
- 10月 第1回意見交換会（熊本市教育センター）
- 1月 第2回意見交換会（ウェルパルクまもと）

平成21年度 登録学生：166人（男子：18人、女子：148人）

- 4月 事業説明会（熊本大学） 参加学生：63人
- 登録証交付式（熊本大学） 継続学生：106人
- 5月 研修会（熊本大学） 参加学生：33人
- 10月 第1回意見交換会（熊本市教育センター）
- 1月 第2回意見交換会（ウェルパルクまもと）

平成22年度 登録学生：146人（男子：21人、女子：125人）

- 4月 事業説明会（熊本大学） 参加学生：62人
- 登録証交付式（熊本大学） 継続学生：78人
- 5月 研修会（熊本大学） 参加学生：53人
- 10月 第1回意見交換会（熊本大学）
- 1月 第2回意見交換会（熊本大学）

平成23年度 登録学生：159人（男子：33人、女子：126人）

- 4月 事業説明会（熊本大学） 参加学生：80人
- 登録証交付式（熊本大学） 継続学生：74人
- 5月 研修会（熊本大学） 参加学生：74人
- 10月 意見交換会
- 1月 10周年記念シンポジウム

(平成24年度から)

平成24年度 登録学生：175人（男子：27人、女子：148人）

4月	登録証交付式（熊本大学）	継続学生：73人
	事業説明会（熊本大学）	参加学生：61人
5月	研修会（熊本大学）	参加学生：66人
9月	第1回意見交換会（熊本大学）	
1月	第2回意見交換会（熊本大学）	

平成25年度 登録学生：183人（男子：28人、女子：155人）

4月	登録証交付式（熊本大学）	継続学生：65人
	事業説明会（熊本大学）	参加学生：58人
5月	研修会（熊本大学）	参加学生：75人
9月	第1回意見交換会（熊本大学）	
1月	第2回意見交換会（熊本大学）	

平成26年度 登録学生：191人（男子：30人、女子：161人）

4月	登録証交付式（熊本大学）	継続学生：56人
	事業説明会（熊本大学）	参加学生：83人
5月	研修会（熊本大学）	参加学生：75人
9月	第1回意見交換会（熊本大学）	
1月	第2回意見交換会（熊本大学）	

平成27年度 登録学生：182人（男子：31人、女子151人）

4月	登録証交付式（熊本大学）	継続学生：54人
	事業説明会（熊本大学）	参加学生：58人
5月	研修会（熊本大学）	参加学生：79人
10月	第1回意見交換会（熊本大学）	
1月	第2回意見交換会（熊本大学）	

平成28年度 登録学生：156人（男子：32人、女子124人）

4月	登録証交付式（熊本大学）	中止
	事業説明会（熊本大学）	中止 ※熊本地震のため
7月	研修会（熊本大学）	参加学生：44人
1月	意見交換会（熊本大学）	

平成29年度 登録学生：177人（男子：31人、女子146人）

- 4月 登録証交付式（熊本大学） 継続学生：64人
- 事業説明会（熊本大学） 参加学生：117人
- 5月 研修会（熊本大学） 参加学生：72人
- 10月 第1回 意見交換会（熊本大学）
- 1月 第2回 意見交換会（熊本大学）

平成30年度 登録学生：168人（男子：33人、女子135人）

- 4月 登録証交付式（熊本大学） 継続学生：69人
- 事業説明会（熊本大学） 参加学生：73人
- 5月 研修会（熊本大学） 参加学生：73人
- 10月 第1回 意見交換会 ※台風接近のため中止
- 2月 意見交換会（熊本大学）

令和元年度 登録学生：156人（男子28人、女子128人）

- 4月 登録証交付式（熊本大学） 継続学生：74人
- 事業説明会（熊本大学） 参加学生：66人
- 5月 研修会（熊本大学） 参加学生：52人
- 9月 ユア・フレンドステップアップ研修会（熊本大学）
- 2月 意見交換会（熊本大学）

令和2年度 登録学生：139人（男子26人 女子113人）

- 登録証交付式・事業説明会
新型コロナウイルス感染拡大予防のため開催中止し教育相談室にて交付
- 6月 研修会（Zoom オンライン） 参加学生：52人
- 11月 ユア・フレンドステップアップ研修会（Zoom オンライン）
- 2月 意見交換会（Zoom オンライン）

令和3年度 登録学生：129人（男子22人 女子107人）

- 4月 登録証交付式 開催中止し教育相談室にて交付
- 4月 事業説明会（Zoom オンライン） 参加学生：62人
- 4月 研修会（Zoom オンライン） 参加学生：58人
- 10月 意見交換会（Zoom オンライン）
- 1月 ユア・フレンドステップアップ研修会（Zoom オンライン）

Kumamoto Education Week における 講演資料

【黒山】 それではディスカッションをさせて頂きたいと思います。

私はこの会の進行役を務めます、熊本大学の黒山と申します、よろしくお願いします。

お一人ずつ簡単に自己紹介をして頂ければと思います。

【川上】 熊本市教育委員会総合支援課のこのユア・フレンドを担当しております、課長の川上と言います、よろしくお願いします。

【平野】 出水小学校の平野と言います。よろしくお願いします。

【木山】 熊本大学教職大学院の1年の木山と言います。よろしくお願いします。

【黒山】 この4人でユア・フレンド活動について中身を深めていきたいなと思っておりますけれども、先程VTRを見せて頂きましたけれども、今活動している子どももそうだし、大学生さんの様子がすごく上手に綺麗に紹介頂いて、私はあれをみてちょっとウルッときたというか、感動したというか、そういう気持ちをとっても持ったんですけれども、私自身が2019年に熊大に赴任して、それでこの事業の大学側のコーディネートを担当させて頂いてますけど、本当にこういう活動をされていることも純粋に素晴らしいなと感じているところです。今年で20周年というところで、ずっと続けている活動になりますけれども、この熊本市教育委員会と連携事業ということで実施して頂いているというところで、川上先生にこの事業を続けて頂いてる中でどのようなことを考えていらっしゃるというのか、感じていらっしゃるのかを教えて頂きたいなと思うんですが。

【川上】 10周年を迎えた時に私、教育委員会で指導主事をしてユア・フレンドを担当しました。隣にいる平野君はその時のユア・フレンドの学生だったんですけれども、当時はやっぱりユア・フレンドという存在というのは非常に重要だなと、何が重要かという、教育委員会が取り組んでいた様々な不登校対策が学校復帰を目指すものばかりだったんですね。学校の先生たちも子どもたちをどういうふうにして学校に復帰させるか、その中で唯一学校復帰を目指さない、そしてユア・フレンドになってくれる熊大の学生さんには「遊び相手、話し相手になってください」、そういうものが20年前から始まったというのは、これは全国でも画期的な方向性が全く逆の取り組みです。平成29年に文科省から、不登校の子どもたちへの支援の

不登校支援
TSUNAGU
～ 誰ひとり取り残さない教育のカタチ～
学校に登校できない児童生徒の居場所づくり及び
学習保障について何が大切なのか明らかにします。

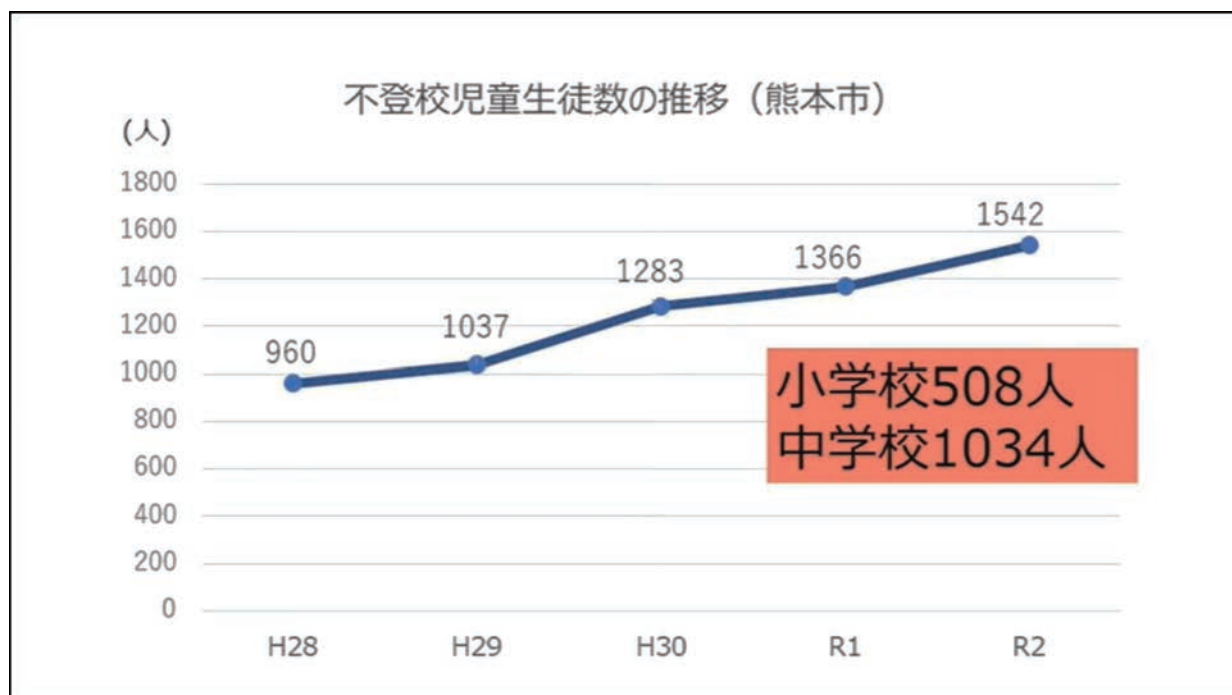
 熊本大学 藤中 隆久	 熊本大学 黒山 竜太	 総合支援課 川上 敬士	 出水小学校 平野 陽介	 熊本大学教職大学院 木山 秀太
 熊本大学 塚本 光夫	 芳野中学校 中野 俊広	 本荘小学校 西尾 環	 本荘小学校 天野 和也	

あり方というのが学校復帰を目指すのではなくて、社会的自立に繋げていこう、つまり歴史からすると先取りをした事業かなというふうに今思っているところです。

【黒山】 本当に20年前から学校復帰を目指さない取り組みを始めようというふうによくぞ思われたなあと、本当に驚いておりますけど、でもやっと日本がこのスタンスに追い付いてきているなという感じも受けて、本当に先進的な取り組みだったんだらうなというふうに思っています。ありがとうございます。今話にも出ましたけど10周年の時ですかね、平野先生が当時学生として参加して頂いていたということですけど、当時のことを思い出してみても、ユア・フレンド活動というものをどんなことをきっかけとして参加されたのかなあとか、実際に活動してた時の事に印象深いこととか、そういうのを教えて頂いてもよろしいですか。

【平野】 はい。10年ぐらいを前になるので記憶として覚えているのは、参加したきっかけとしては大学の先生達からこういう事業がありますよと紹介して頂いて、参加してみようかなと思ひ、その委員会の先生方が説明をされて実際に活動することになって、中学生と出会ったんですよ。中学校の中で学校に行けない中で家庭に行かせて頂いて家の中でゲームをしたりとか、外に出るのが苦手な子だったので、学校の先生から外で活動することを呼びかけて頂けないですかという話を頂いていたので、野球が好きなお子さんだったので「野球しない？」って誘ってキャッチボールをしたりとか、複数関わらせて頂いたので、その子その子に応じて「野球をしよう」と誘ってみたりゲームが好きな子には「ゲームしよう」とか、音楽好きな子には「音楽聞こうか」とか、本当にお話相手遊び相手で1回の活動1時間2時間とかなんですけど、そういったコミュニケーションを取っていくというところがまず最初だったかなというふうに思っています。そんな活動を2年間ですかね、させてもらって、現場に自分が教職員というか、学校の教員になったということが、今覚えている記憶になります。

【黒山】 結構今さらっと、取り敢えずやってみようかなあということで参加されたということなんですけれど、今日お二人、現役で今やられている木山さんにも来てもらってますけれども、二人とも男性じゃないですか。割とその女子学生さんは結構参加して頂いている割合



も多かったりするんですけど、そういう中で男性としても参加してみようと思われるというのはすごく貴重というか、有難いと思う部分でもあるんですけど、その辺とかはどうなんですか。あんまり気にされたりとかは特になくやってみようという。

【平野】今も男性少ないんですか。

【木山】そうですね、周りは研修会とか開いてもオンラインでの研修会になるんですけど、画面に女子学生がブワーってこう並んで（笑）、片身が狭い思いをしてる時もありますね。

【川上】10年前くらいだったらですね、まだ今の半分ぐらいしか男子学生いませんでした。

【黒山】今よりもっと少ないと。

【川上】多分十数名です。今は20名以上はいると思いますけど、多い時は30名超えていたのでだんだんまァ男子学生も増えてきたんですね。

【黒山】徐々に増えてきているんだろうなあと。学校復帰を目指さない、とにかく純粹に話し相手、遊び相手になると言うところで、ある種の葛藤みたいなことと違ってなかったですか。

【平野】実際に活動していくなかで、子どもと関わるなかで、ですか。もちろん何を目的にしているのかなと思ったことがありました。実際関わって子どもたちとこう遊ぶだけでいいのかなとか、学習指導はしないでね、みたいな話はされてたので、でも何でその子が行けないのかという話を学校の先生だったり保護者の方の話をする中で、学習が苦手という話をされると教えたらいんじゃないのかなと、学生ながらに思った時もあったんですけど、葛藤というか難しさはありましたけど、試行錯誤しながら何したらいいのかなという1週間に1回だったり2週間に1回の活動をしていた記憶はあります。

【川上】私10年ぐらいユア・フレンドに関わってますけど、いつも悩みは一緒です。何年経っても、やっぱり何でこの子は不登校になったのかっていうのは、学生はやっぱり考えてしまう。それから学校復帰を目指すんじゃないけど、心のどこかには関わったことで学校に行ってほしいというやっぱり期待を持ってらるんですね。だから、教員になりたいと思ってるんだと思います。そこが教育者を目指す大学生を活用しているっていうところのギャップというか、

不登校児童生徒への支援 **社会的自立**

適応指導教室 不登校対策サポーター

SC（スクールカウンセラー）

SSW（スクールソーシャルワーカー）

ユア・フレンド **オンライン学習支援**

単なる別の経済学部とかの学生をここに使えばそういう意識が働かないのもっと子供と自由にただ遊ぶ、そういう活動ができると思いますけど、そこはもう永遠に変わらないと私は思います。

【黒山】 本当にそうですね。教育学部の学生がこの活動に従事しているっていう部分のギャップ、ジレンマとかそういう部分がありながら、でもやっぱり教育学部の学生にやってもらえるって事に凄く大きな意義があるんじゃないかなっていうのはすごく感じます。そういう意味では現場で活躍頂いている先生の立場で実際その ユア・フレンドの経験っていうものが今の現場でどんな風に役立つというか、生きてるのかなっていうのを、ぜひ経験者の声を聞かせて頂きたいなど。

【平野】 そうですね。実際に立場が違うので、学生の時の関わり方と、実際教職員になって子どもと関わる時には責任も違いますし、関わり方も変わってくると思うんですね。僕がユア・フレンド活動をせずに学校現場に出てた時と、して出てた時というのは単純に比較は比べる時に難しいと思うんですけど、経験をしたことで抱えているものとか、子供が思っている難しさ、学校に対する難しさ、学校に行けない想っているのがどういうものなのかなっていうことをまずは聞いて寄り添いたいなという感覚にはなっています。今現在関わっている子ども、今まで約10年間かかわってきた子の中にも学校が少し苦手なんだというお子さんはいますので、そういった時に保護者の方に「どういった困り感というか苦手意識があるんですか」ってまず聞こうとか、絶対学校に来てほしいという思いはかなり自分の中では強いと思うので、持っている来てほしい来てほしいという思いをストレートに伝えていく場面もありますし、そうじゃなくて来れない理由をしっかりと聞かなきゃいけないなって思いながら保護者の方、子どもたちに寄り添おうという狭間で揺れ動く時に、ユア・フレンドの活動は生きていくのかなと今自分では振り返って考えております。

【黒山】 じゃあ今現役で活動してもらっている木山さんがここにおられますけれども、参加してみようというきっかけとかはどんなだったんですか。



【木山】 その（学部生の）頃から教育実習に少しずつ参加するようになったものの、見るのはいつも授業だったり先生のホームルームだったりそういうところだけ見て、クラスにやっぱり机がポツンポツンと空いてる子の実態というのを教えてくれることもないですし、どうしてるんだろうって気になるけどわからないっていうような状況の中でユア・フレンドっていう活動があって、そういう不登校だったり悩みを抱えている子どもに直接関われる機会っていうのがやっぱり教育実習では味わえない経験というか、それが現場で教員になりたい自分としては現場で活かせると思ったところで参加したいなと思って。

【黒山】 そうですよね、実習だと見学するにしても学校を見学するとなるし、授業を模擬授業するのも結局来ている子たちに対する授業をするっていうところだから、そこに来れていない子達がどういう状況なのかなっていうのを考えたという部分が大きいですかね。木山さんは今活動の最中だと思うんですけど、どんなことを感じたり考えたりしながら今されてたりしますか。

【木山】 実は今日も3人ユア・フレンドをみてきて、中学生3人と小学生を1人みてきたというところで、今学校で活動しているんですけど、やっぱりその子達にとっては、学校に来たこと自体もう凄く褒めるべきことだと思うので、どうせ来てくれたなら1時間1分1秒その子に楽しんでもらいたいという気持ちを持ちながら、その上に自分にどんな活動が出来るか、どんな話が出るかをずっと考えながら、今は子どもたちと接しています。

【川上】 今言ってくれたんですけど、関わってくれる子どもが笑顔になるというのは、それだけでも私はユア・フレンドの価値があると。さっき小学生の子どもさんの、関わっている子どもさんの様子を見て頂いたと思うんですけど、楽しそうですね。たぶんあの姿を教室で出せるかという、出せないんじゃないか。ユア・フレンドのお姉さんだったからああやって大きい声出したり、楽しそうにやっている。本当は私がいつも思うのは、不登校になっている子というのは原因とかそういうのを考えているんじゃないくて、やっぱりエネルギーがぐっと落ちてるんですよ。同じ年代の子どもと違うところでエネルギーがない、自信がない。その



エネルギーとか自信をつけさせてやる一つの活力がこのユア・フレンドの学生の皆さん。だから子供さんも言っていたように、ユア・フレンドの前の日はドキドキワクワクって、それだけで子供がエネルギーを持ってくる。もうそれで学校来ればいいんですけど、来れない子はそれらエネルギーを蓄える一つの場面になるんじゃないかなと。

【黒山】 喜ばせたいみたいな感じで関わったりするんですか、どうなんですか。

【木山】 本当に活動を通して楽しくっていう自分も一緒に楽しむ、年の離れた友達、遠いところにいるような友達に会いに行くような感覚でその時間を過ごして、やっぱり自分が楽しむことが必要なのになって、それってユア・フレンドに限らず授業だったり学級経営にもつながってくるようなことだと思うので、そこを大事にしながら接しています。

【川上】 先生が楽しく授業をやると、子どもたちも楽しいんですね。どんな良い授業をしても、楽しくなさそうな表情で授業されると子供は楽しくない。やっぱりやる側が楽しくないと子供には伝わっていかないんじゃないかなあって、今ちょっと話し聞いてですね。だから使命感でユア・フレンドやっちゃうとそこで悩んじゃう自分自身。だから自分も楽しもうと思ってやれば、子どもも自然とそれを感じて楽しくなって、エネルギーがどんどん溜まっていくんじゃないかなと。

【黒山】 意見交換会とかで実際活動している学生さんたちに話を聞いたりすると、「どんなことを話しかけたらいいかわからなくて戸惑います」とか、結構そういう学生さんの声は聞くんですね。多分そういう学生さん達って、特に教育学部に入ってくる学生さんって結構真面目な方が多いので、やっぱり何とかをしないといけないんだみたいなところがすごくあるというか、逆に言うとそんな肩肘張らなくていいんだと、本当にこの子との時間を純粋に楽しめたらいいんだっていうふうにどっかでスイッチが切り替わるというか、そういう瞬間があることで多分二人みたいに自然と関わっていけるっていうことが持てたりするのかなと思うんですけど。でもなかなかそれは意外と簡単なことでもないのかなという風にも思ったりもします。



【川上】簡単そうで難しい。

【黒山】すごく難しいと思います。

【川上】ただ、不登校の子もって家にいることが多いので、中学生のインタビューにもあったように、兄弟がいれば兄弟と遊ぶ、家族でどっか出かけるといったら行くわけですけど、そこに別の立場で自分と関わってくれる本当に年齢の近いお兄さんお姉さんが家に来たり学校に来たりして、そこに关わることでその子が何かを学ぶというか、それが最終的には家族以外の他者と関わるっていう経験をたくさん積むと社会的自立に繋がっていくんじゃないかなと。

【黒山】社会の人と世の中の人と繋がっていくきっかけですかね、という部分ですよ。

【川上】それこそ繋ぐですよ。

【黒山】繋ぐですよ。大学側としてもやっぱり先生になって頂きたいなとももちろん思うんですけど、先生になる前に大学生の段階でそういう不登校の状態になっている子たち一人一人に寄り添うっていうことをしているのといないのとではずいぶん現場に出てからのそういう子たちに対する思いの持ち方というかなそういう部分とかはすごく違う部分はあるんじゃないかなと思うので、一人でも多くの学生さんにこれからもご協力頂けたら。

【川上】ちょっと平野先生に聞いていいですか。今学級担任してますね。すべての子と毎日何かしゃべってます？

【平野】いや、学校現場でよく言われるので意識をしてこう関わろうとするんですけど、全員と言葉を交わすことはできてないですね。

【川上】統計とってないのでわからないんですけど、意外と不登校になっている子供っていうのは、目立ちもしないし、勉強がよくできる、スポーツができるとかでもなく、なんかちょっと先生が手助けしないとかなかなかうまくやれないそこにも当たらない、ちょうど中間くらいの子供たち。私も元教員なので自分を振り返ると、目立つ子とか逆に心配な子にはよく声をかけます。だけど声のかからない子はずっと声がかからない。何でかという、声をかけることも必要ではないと思ってしまっていて、声をかけないんですけど、実はそういう子たちの方

登壇者プロフィール

黒山 竜太

熊本大学大学院教育学研究科准教授



くろやま りゅうた

長崎国際大学、東海大学を経て2019年10月より現職。専門は臨床心理学。熊本県臨床心理士・公認心理師協会理事（学校支援領域担当）。教育学部附属教育実践総合センターのユア・フレンド事業では、大学側の窓口担当者として学生の募集・推薦・研修・単位認定などに携わっている。同センター教育相談事業も担当。

川上 敬士

熊本市教育委員会総合支援課課長



かわかみ けいし

小学校、中学校の教員を務めた後、熊本市教育委員会で指導主事として5年間勤務。その後、教頭、校長を経て、総合支援課勤務4年目。これまで生徒指導主事、熊本市中学校生徒指導委員会事務局長、会長等を歴任。現在、教育ICTを活用したオンライン学習支援事業とユア・フレンド事業を担当課の課長。

平野 陽介

熊本市立出水小学校教諭



ひらの ようすけ

平成21年から3年間（大学2～4年生時）ユア・フレンド活動を経験。現在教職10年目。

木山 秀太

熊本大学教職大学院生



きやま しゅうた

熊本大学教育学部2年時より、ユア・フレンド活動（学校派遣、家庭派遣）を経験。現在、ユア・フレンド活動歴4年目。

が逆に学校に来れなくなる子が多いんじゃないか。ちょっとでもいいから「今日元気？」とか「昨日何した？」とか、そういう声掛けがまんべんなくできれば、不登校も少しずつ減っていくような気がするんですよ。ユア・フレンドがそれを実際一人の子供さんとか複数の子にやってあげているわけだからですね。だから学校の先生も子どもたちに1日1回はエネルギーを与えてやるっていう、そういうことをユア・フレンド経験した学生が気づいてくれれば学校現場で少しでもやってくれと、ひいては熊本市全体の子どもたちのためになるんじゃないかなと、そんな気がちょっとしてますね。

【黒山】 本当にちょっとした声かけていう所ですかね。それをするっていうことだけでもずいぶん違うんじゃないかっていうところを感覚的に理解して頂くっていうんですかね、なんかそういうところは確かにユア・フレンドの経験をされているというところが生きていく部分には、もしかしたらなるもしれないですね。沢山子どもたちがいるので毎日全員は難しいとかはあるかもしれないですけど、でも何となく浮かびますよね。顔が、今日あの子に声掛けてないなど。

【川上】 (平野先生へ) 来週からチャレンジしてください。

【平野】 頑張ります。(一同笑)

【黒山】 時間がきてますので、この活動が20周年ということで、これからまた次の10年20年って繋がっていくといいなと思ってのんですけども、これからですねユア・フレンドの活動が続いていくにあたって、やってみようと思う学生さんたちに良かったら是非お二人からメッセージみたいなちょっと言ってもらえると嬉しいなと思いますけれども。先に木山さんから。

【木山】 はい。3年4年ほど活動を続けてきて一番思うのは、先生を目指している人には全員活動をしてほしいなとずっと思いますね。やっぱり活動をして現場に出て行った人とせずに出て行った人ってやっぱり何か働き方もなんか違うような感じに聞こえるんですよ、そういう子供たちを見た時に、やっぱりユア・フレンド活動を経験して現場に出ていく人が学校現場を楽しんでいるように僕は見えます。なので、みんな教育学部生大学院生問わず将来子ども



と関わる仕事に就く人には是非活動をしてほしいなと思います。

【黒山】ありがとうございます。平野先生からもお願いします。


【平野】そうですね。現場に出て、いろんなお子さんがいらっしやるので、学校現場で大学生が来て頂いて実際に活動をして頂くという立場で今学生さんと関わるんですけど、(ユア・フレンドを)とても楽しみにしてる子たちは僕が出会った子たちの中にもいますし、必要な存在なのかなと思います。自分がやっていた時には気づかなかったような学生が来てくれることの良さ、子どもたちにとってその学生さんが来ることをモチベーションに学校に来れるとか、来たことで学生さんが教えてくださる情報もたまにあったりするんですよ。こんなやり取りしましたよと。教えられる範囲ですけど、子どもが「先生に伝えていいよ」って言った事を子供から学生さんが聞いて頂いて、学生さんから学校現場に伝わってくるということのはとてもあるので、そういった面でも子どもと職員の橋渡しの存在にもなっていますし、学校現場でも助かっているというか、学生さんの将来だけじゃなくて今子どもたちが抱えてるサポートが必要な面に学生さんが関わって下さっているの、熊本市が20年になるって僕も報道で知ったので、そんな長い期間やってるんだということにも僕は驚きましたし、これから10年先20年先、僕が現場で働いている中で絶対ユア・フレンドの学生さんと関わることはこれからもあると思うので、是非男性女性関係なくいろんな方が(活動を)して頂けるなら、個人的に担任としてとても助かるな、有難いなと思うところです。

【黒山】そうですね、今は学校の先生の担任という立場からでも、学生さんに来てもらうと間をつないでくれるという役割としてもありがたいというのはありますか。でも今コロナ禍ということで、そもそもなかなか学校に集めるのがちょっと難しかったりとか、人と気軽に繋がるっていうのはかえって難しい状況になっている。でも一方でこういう状況だからなお、また改めて人と繋がるということがすごく大事だっていうのをより強く感じることもあるかなというふうに思っています。そういう意味でもこのユア・フレンドという活動が本当にまず、その大学生という人とまず繋がるというところから、そこからですね、本当に学校に

TSUNAGU


～ 誰ひとり取り残さない教育のカタチ～

04 まとめ



藤中 隆久
熊本大学大学院教育学研究科教授

ふじなか たかひさ
九州大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得。研究者としての専門は、「心理テスト(特にバウムテスト)」「カウンセリング(特にクライアント中心療法)」「不登校」「古武道」「安土桃山時代のキリスト教徒」など。10年前までは、不登校、ひきこもりのカウンセリングを多く担当してきた。教職大学院では、主に生徒指導関係の科目を担当している。



Kumamoto Education Week 2021-22

行くか行かないかというよりも、世の中と繋がり続けて、そこでまた自分が何か出来ること、何かしら楽しめることを見つけられるというか、一つのきっかけっていう風にも利用し続けてもらえたら、すごく嬉しいなという風に思います。

もっともっと話したいんですけど時間が来ましたので、この辺でディスカッションは終わらせて頂きたいと思います。今日はどうもありがとうございました。



編集後記と謝辞

20年の重みをかみしめながら

熊本大学大学院教育学研究科 准教授 黒山 竜 太

私は2019年10月より熊本大学大学院教育学研究科・教育学部へ赴任し、ユア・フレンド事業を担当させて頂いております。専門は臨床心理学で、赴任前までは主に心理的不適応を抱える大学生への直接的支援を行ってまいりました。それが熊大にきて、学生が自主的に地域の不登校に陥っている小中学生への支援を行う活動を行っており、そのお手伝いをする役目を頂けるといことで、大変うれしく思いました。しかし実際は、市教委教育相談室の皆様が学生と子どもたちとのマッチングから日々の活動の悩みへの相談まで、学生たちに非常に丁寧にサポートしてくださっていました。私が直接学生たちと活動について共有できるのは意見交換会の場くらいで、あとは裏方・黒子に徹するのだとわかり、正直少し寂しい気持ちにもなりました。しかし、それは私が自分の役割を認識しきれていなかっただけで、「熊本市教育委員会」という組織と「熊本大学教育学部」という組織が連携して事業を立ち上げ、継続していくにあたり、私の立ち位置は非常に重要なポジションにあるということが徐々に理解できてきました。その矢先に、この20周年という節目を迎えました。

10周年の際には記念シンポジウムが開催され、私もその報告書を拝読いたしました。立ち上げから継続に至るまでの錚々たる顔ぶれが並び、皆様はその思いを綴っておられました。それを踏まえて今回の20周年をどうするかを相談するなかで、KEWでの企画が出来上がっていきました。「TSUNAGU」と題されたKEWでの企画は素晴らしいものでした。「学校復帰を目指さない」ことを、教育の立場で堂々と打ち出し、それよりも「社会とのつながり」が大事であることをしっかりと発信することができるのは、日本全国広しといえども、ここ熊本市だけではないでしょうか。これからのユア・フレンドは、熊本市で続けていくだけでなく、この取り組みを全国の学校・地域に広げてもらうことではないかと思えます。その一步を、今年中野浩幸先生が切り開いてくださいました。少子高齢化に歯止めがかからない今、子どもたちの未来を大人一人ひとりが真剣になって考え、実行していくことが求められていると感じます。

また、これを機に活動してくれている学生たちにアンケートをお願いし、生の声を拾うことができました。課題についてはそうだよなぁ…と思うことばかりで、この事業発展のために一つひとつ実現していきたいと思っています。また、ユア・フレンド活動を通じて学生たちが成長してくれていることにも、教員としても一人の大人としても、うれしく思います。

兎にも角にも、この事業は子どもたちを支えるだけにとどまらず、学生の成長、そして地域の子どもたちへの温かなまなざしを育むことにもつながる、大変重要な取り組みであると感じています。日頃から事業を支えてくださっている熊本大学教育学部の先生方や熊本市教育委員会の皆様、関係各位に、厚く御礼申し上げます。また、この20周年記念誌の作成を通じて、その重みを改めて感じることができました。お言葉を寄せて下さった皆様に、改めて御礼申し上げます。次の10年20年の継続とともに、日本全国の子どもたち一人ひとりが自分を認め生き生きと成長していけるよう、引き続き心を寄せサポートして頂きますよう、よろしくお願い申し上げます。

付記：本報告書は令和3年度熊本大学教育学部・部局長裁量経費の助成を受けた。

ユア・フレンド事業20周年記念誌

令和4年3月31日

編集・発行 熊本大学教育学部・熊本市教育委員会
〒860-0081 熊本市中央区京町本丁5番12号
TEL(096)325-3282 FAX(096)352-3468
印刷 株式会社 かもめ印刷